

人類学博物館紀要 第 30 号
(ISSN 0388-8711)

南山大学人類学博物館紀要

第 30 号

南山大学人類学博物館

2012

目 次

巻頭言

保美貝塚出土の安行 3c 式土器

..... 大塚達朗... 1

2030 年、私たちのミュージアムのつくりかた

..... 手塚朋子... 33

山の田古墳出土山茶碗の再報告

..... 嶋田奈緒子... 41

新しい人類学博物館への提言

..... 黒沢 浩・西川由佳里... 51

巻頭言

人類学博物館の目指すもの

人類学博物館が現在の G 棟地下に置かれたのは、1983 年のことである。それから 30 年近い年月が過ぎ、今年（2012 年）5 月に閉館することになった。言うまでもなく、新たなスタートを切るためである。現在の博物館には、多くの卒業生が愛着を持っており、そうした卒業生たちの思いを大切にす意味でも、閉館までのわずかな期間に、人類学博物館に来てもらい、語り合えるような機会を設けたいとは考えている。

われわれにとって気になるのは、人類学博物館で学んだ卒業生たちが、新しい人類学博物館に対して、どのような期待を持っているのか、ということである。そして、これは何も卒業生に限ることではない。人類学博物館を利用する人たちが、どのような博物館を望んでいるのか、非常に気になることである。

博物館の利用者は、不特定であり、博物館側が利用者を選ぶことはできない。したがって、想定されるすべての利用者の要望をとらえることは現実的ではなく、博物館の活動方針に照らして、主たる利用者を想定せざるを得ない。今回掲載した黒沢と西川による報告は、そうした意見聴取の記録である。

この中で、特に強調したいのは視覚障害者の方々を対象としたことである。なぜ、博物館の利用者として視覚障害者が敢えて挙げられているのか？

先に、博物館は利用者を選ぶことができない、と述べたが、これはあくまで建前の話であって、実際には博物館は利用者を選んでいる。博物館が選ぶ利用者とは、健常者であり、その国の言語を母語とする人に他ならない。言い換えれば、身体に障害がある人や外国人は博物館の利用対象からは巧みに排除されているのである。しかし、昨今の社会的な障壁を低くしていこうという動きや、国籍を問わない人の動きの活発化の中で、博物館のみが聖域化することはできないであろう。

新しい人類学博物館が目指すのは、すべての人が普通に楽しめる博物館を作ることである。そして、ここでいうすべての人とは文字通り「全ての人」を指す。

「全てを人の好奇心を満たす博物館」。これがわれわれの目標である。

2012 年 3 月
博物館運営委員会委員長
人文学部准教授
黒沢 浩

保美貝塚出土の安行 3c 式土器

大塚 達朗

(1)

南山大学人類学博物館には、関東地方および東海地方の著名遺跡の考古資料が多く所蔵されている。筆者らは、そのうち、渥美半島に位置する保美貝塚(田原市所在)の資料——1965年に本学教員(当時)小林知生が実施した調査(小林ほか 1966)で得られた資料(土器・石器・骨角器・貝製品・動物遺体など)が中心で、ほかに1950年に本学教員(当時)中山英司がおこなった調査(安藤 2007)で得られた資料の一部を含む——の再報告および各種分析所見を公開した(大塚編 2011a)。詳しく述べるならば、南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター事業として、文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業に2006~2010年度採択された「学術研究の文化資源化に関する研究」(代表黒澤浩)の成果を公開する目的で刊行された研究叢書の一つとして(南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告第3冊として)、である。人類学博物館オープンリサーチセンター部会の一つとして結成された縄文部会(部会責任者:大塚達朗)が、人類学博物館所蔵の縄紋時代遺跡の考古資料の再検討を通じて、日本列島の狩猟採集民のもつ物質文化の多様なあり方について研究するプロジェクトを担ってきた、その成果としてまとめたものである。

保美貝塚は、伊川津貝塚、吉胡貝塚と並

んで東海地方を代表する貝塚であり、新大別の晩期(=5大別〈早期・前期・中期・後期・晩期〉)が提唱された山内清男の著名な編年表(図1)においても、その晩期に——詳しくは晩期末に——位置づけられていた(山内 1937:31〈縄紋土器型式の大別〉)。だが、遺物内容を具体的に知ることできる報告書は皆無に等しかった。したがって、当該研究報告は保美貝塚の実態を知る上で、貴重なものといえよう。しかも、当該研究報告は、六一書房より刊行されたことにより、より広く入手可能になったといえる(大塚編 2011b)。

(2)

保美貝塚は、明治時代以来連綿と調査されてきたが、本学中山英司調査地点(B貝塚の北側)からは、1952年刊行の『吉胡貝塚』の報文中で山内が説く晩期新段階(後期後半A型式→後期末B型式(宮滝式並行:引用者註)→晩期旧A段階→晩期旧B段階→晩期中段階→晩期新段階(→晩期直後=弥生式)[山内 1952:113-124])に相当する凸帯紋土器、ないしは、今日説かれるところの五貫森式土器(杉原・戸沢 1963)を主体とする凸帯紋土器が大量に得られていたことが、注記などのチェックから分かった(大塚・邊見 2011a・c)。他方、本学小林知生調査地点(B貝塚およびC貝塚近く)からは、決して量は多くはないが、後

期後半から晩期前半を中心に、そして量はさらに減じるが晩期後半の凸帯紋土器までが得られた。そして、土器片一つ一つを丁寧に観察・分析した結果が報告され、「出土したこれらの晩期の土器は、単一な型式とは認められず、晩期前葉から後葉にいたる諸型式がみうけられる」（小林ほか 1966：9）と述べられた。縄文部会による再検討からも（大塚・邊見 2011a・b、坂口・奥野・大竹・大塚 2011a・b、坂口・佐野・邊見・大竹・松本・大塚 2011a・b）、「単一な型式とは認められず」云々という 1966 年報告所見の妥当さが再確認された次第である。

筆者は、当該研究報告を編集する一方、「檀原式紋様土器と安行 3c 式土器からみた保美貝塚」と題した論文を著した（大塚 2011a・c）。その中で、東海地方の縄紋晩期研究の混乱ないし停滞の例として、増子康真による「保美Ⅱ式」（増子 1980）を祖上にのせ、「保美Ⅱ式」はきわめて恣意的な判断によるものであるために、棄却すべきことを厳しく注意した。何故ならば、「出土したこれらの晩期の土器は、単一な型式とは認められず、晩期前葉から後葉にいたる諸型式がみうけられる」保美貝塚の資料をもとに、増子が「保美Ⅱ式」式を設定してしまったからである。「保美Ⅱ式」の標式遺跡が保美貝塚となる訳であるが、そのようなことは全くあり得ないと説いたのである。対案として、東海地方の縄紋晩期土器型式編年を論じるに当たって、亀ヶ岡式のほかに安行 3a 式から安行 3c 式土器や檀原式紋様土器などの異系統土器を列挙し、その有意性を強調しておいたが、分析過程でいろいろと驚いたことがある。

実は、東海地方の縄紋晩期土器型式編年

は、山内が提示した吉胡貝塚編年（後期後半 A 型式→後期末 B 型式（宮滝式並行：引用者註）→晩期旧 A 段階→晩期旧 B 段階→晩期中段階→晩期新段階（→晩期直後＝弥生式）〔前掲〕〕によって本格的な骨格が形成された、と筆者は考えてきた。ところが、増子の「保美Ⅱ式」が、山内の仕事とは全く関わりのないものであったことに気づき、驚いた。何故なのか、保美貝塚のシンポジウムや公開研究会の機会を通じていろいろ調べてみたところ、山内の吉胡貝塚編年を参照しない・検証しない風潮が東海地方の研究者間に蔓延していることと、正に、「保美Ⅱ式」はその結果であったことに非常に驚かされた。そのような風潮下では、まともな型式編年の構築や型式編年研究の実りある議論ができる訳がないのである。山内の吉胡貝塚編年を参照しない・検証しない風潮こそが、東海地方の縄紋晩期研究の混乱ないし停滞の最大の原因であることを痛感した次第である。

小論は、異系統土器の一つとして論じた東海地方の安行 3c 式土器についておよび山内が提示した吉胡貝塚編年の重要性に鑑みて、そして、少ない時間でまとめざるを得なかった前稿（大塚 2011a・c）の補訂もかねて、あらためてそれらを論じるものである。当然ながら、前稿にて強調したことは今回も強調することになるために、重複する部分があることもあらかじめお断りしておきたい。

(3)

さっそく、筆者の保美貝塚出土土器の再検討の結論（大塚 2011a・c）をくり返すと、増子が、時期的に相当ばらつく 1965 年小

林知生調査保美貝塚出土土器資料をもとに、無理矢理「保美Ⅱ式」を設定してしまった(増子 1980)、であり、したがって、「保美Ⅱ式」は無根拠である、と結論づけたのである。小論で、先に、「保美Ⅱ式」はきわめて恣意的な判断によるものであるために、棄却すべきことを厳しく注意した」と述べたが、具体的には、今述べたように時期的にまとまりのない非常にばらついた土器資料を以て、増子が「保美Ⅱ式」を設定してしまったからである。

増子によれば、晩期第1段階に増子自身が設定した「吉胡BⅠ式」(増子 1979)をあてることを前提に、「保美貝塚では吉胡BⅠ式から晩期全般に及ぶ土器の存在をみるが、晩期の第2段階に遺跡形成の中心がある。したがって、これを保美Ⅱ式土器と呼称し型式名とすることは妥当であろう」と判断して、晩期第2段階が「保美Ⅱ式」で、晩期第3段階が稲荷山式とのことであつた(増子 1980:15-19)。だが、「晩期の第2段階に遺跡形成の中心がある」という増子の遺跡形成論に関しては、縄文部会の再検討によって、その認定の方がはなはだ疑問であることが明らかにされた(坂口・奥野・大竹・大塚 2011a・b)。また、縄文部会による土器資料の再検討によって、増子が見立てた在地土器の様相や編年的位置づけに関して、疑問がわくものばかりであることが多方面から明らかにされたのである(坂口・佐野・邊見・大竹・松本・大塚 2011a・b、大塚 2011a・c)。

1966年刊行の報告書(小林ほか 1966)を慎重に再吟味すると、すでに桜井式と、「安行Ⅲc式」(筆者は安行3c式と表記する)が報告されていた。安行3c式につい

てはあとで述べるとして、1966年に報告された桜井式について増子の扱いをあらためて説明したい。

1966年刊行報告書第4図土器拓影-7[38]([]の中の番号は、人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告第3冊[大塚編 2011a・b]-図3中に掲載した土器個体番号)が、桜井式として報告された(小林ほか 1966:8)。縄文部会による再検討でも、それを桜井式と同定した(坂口・佐野・邊見・大竹・松本・大塚 2011a・b)。増子は、その桜井式土器を「保美Ⅱ式」の1類に含めた(増子 1980:18〈第8図 保美Ⅱ式土器(保美貝塚出土)-11〉)。その一方、増子は、桜井式を稲荷山式並行におき、しかも、〈桜井式—稲荷山式—安行3c式〉という広域編年を考えたのであるから(例、増子 2003、2004)、晩期第3段階の稲荷山式より前の段階として「保美Ⅱ式」がどうして成り立つのか、筆者は理解に苦しむのである。

さらに疑問点をくり返したい。

ふりかえれば、増子(1980)の「保美Ⅱ式」は、有紋土器の一群「第8図 保美Ⅱ式土器(保美貝塚出土)」(1~38〈1類:1~12、2類:14~19、3類:13、4類20~25、5類:26~35、6類36~38〉)と、無紋土器の一群「第9図 保美Ⅱ式土器(2)(保美貝塚出土)」(39~46〈7類〉)とで設定されたものである。だが、「第8図」の1~38中には、関東および東北方面の異系統土器と関西方面の異系統土器が数多く含まれる点を見のがすわけにはいかない。それら異系統土器の時期を検討すると、以下のようになる([]の中の番号は、人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告第3冊[大

塚編 2011a・b)-図 5 中に掲載した土器個体番号)。

29 [72] (初出 小林ほか 1966:3 <第3 図 土器拓影-15>) : 後期末の土器で、瘤付土器第Ⅳ段階あるいはそれに並行する入組紋系安行 2 式。

31 [67] (初出 小林ほか 1966:3 <第3 図 土器拓影-18>) : 晩期安行 3a 式。

32 [76] (初出 小林ほか 1966:3 <第3 図 土器拓影-4>) : 晩期安行 3c 式。

34 [75] (初出 小林ほか 1966:3 <第3 図 土器拓影-3>) : 晩期安行 3c 式。

33 [69] (初出 小林ほか 1966:3 <第3 図 土器拓影-5>) : 晩期大洞 B2 式。

35 [70] (初出 小林ほか 1966:3 <第3 図 土器拓影-6>) : 晩期大洞 B2 式。

26 [73] (初出 小林ほか 1966:3 <第3 図 土器拓影-8>) : 晩期大洞 BC 式。

38 [81] (初出 小林ほか 1966:7 <第7 図 土器拓影-2>) : 晩期の土器で、檀原式紋様土器から大きく変化したもの(安行 3c 式並行か)。

「保美Ⅱ式」には、明らかに時期が大きく違う異系統土器が含まれるのである。しかも、今回刊行された研究報告によって、後期末の土器(29 [72]) が含まれていたことを筆者と邊見が明らかにしたのであるから(大塚 2011a・c、坂口・佐野・邊見・大竹・松本・大塚 2011a・b)、どうして「保美Ⅱ式」が成り立つのか、ますます不思議さが増すのである。

保美貝塚出土の安行 3a 式帯縄紋系大波状口縁深鉢形土器である 31 [67] を、増子は「安行Ⅲb 式」として紹介した(増子 1980:16-17)。他方、同貝塚出土の大洞 B2 式小波状口縁深鉢形土器である 33 [69] と

35 [70] については、増子は、明言を避けたようである(増子 1980:16-17)。なお、保美貝塚の他の例である 26 [73] については、増子は、「大洞 BC 式」と認定した(増子 1980:17)。筆者はその点は賛成である。そして、「安行Ⅲb 式」(実は安行 3a 式)と「大洞 BC 式」それらに依拠して、「保美Ⅱ式」の広域編年上の位置づけを考えたようである。そののち、増子は、愛知・水神貝塚出土土器(増子 1996:68 <第5 図-1 (初出 小畑ほか 1997:36 <挿図第 23 第 1 生活面出土の縄文式土器 その 1-1>>>)を「安行Ⅲa 式の新しい段階に対応する地域的な変容を示す様相(具体的には縄文が使用されない点)」として紹介して、「保美Ⅱ式」の細別にも言及した(増子 1996:68-69)。しかし、肝心の水神貝塚例は、むしろ安行 3b 式である。増子の「安行Ⅲa 式」(水神貝塚例)は安行 3b 式で、増子が「安行Ⅲb 式」に比定する 31 [67] (保美貝塚例)は、むしろ、安行 3a 式で、編年の位置づけが全く逆であったといえる。

ということは、「保美Ⅱ式」の細別および当該式の広域編年上の位置づけは(増子 2004)、失礼ながら、全く意味をなさないのである(さきほど指摘した保美貝塚の安行 3a 式である 31 [67] や大洞 B2 式である 33 [69]・35 [70] が在地のどのような土器と伴うのかは、残念ながら、よく分からない)。また、保美貝塚に桜井式の 7 [38] があり、桜井式を安行 3c 式並行と考える増子には(「桜井式—稲荷山式—安行 3c 式」)、実際に 32 [76]、34 [75] という安行 3c 式土器が保美貝塚から検出されたのであるから、まことに都合いい事例と思われるが、増子はそのような方向の議論を全く立ち上げな

かったことも指摘しておく。

近著（増子 2011）をみても、増子には自身の晩期編年の誤りないしは型式同定の誤りを再考する姿勢がみられず、そして、異系統土器の分析による社会考古学が増子は興味を有さないの、こちらの方で、「保美Ⅱ式」にとらわれずに（あえていえば、大洞 B1 式・大洞 B2 式や安行 3a 式に無頓着な増子の「吉胡 B I」にもとらわれずに）、上記 32 [76]、34 [75] の安行 3c 式土器はどのような意義を有するのか、あらためて、私見を開陳する必要を痛感するのである。また、38 [81] の土器（晩期の土器で、櫃原式紋様土器から大きく変化したものと考え）を正しく理解するには、その安行 3c 式の論究なくしては得られないのであるが、それ以前に、山内が果たした縄紋晩期土器研究の意味合いを論じておく必要があると考える。そうしないと、筆者が、安行 3c 式がみいだされたことに何故こだわるか、諸賢に理解しにくいと思われるからである。

(4)

筆者は、山内が吉胡貝塚第二トレンチ報文中の註で宮瀧式を後期末に位置づけたことに関しては（以下参照）、大きな誤りであるとかつて述べたことがある（大塚 1995、2000）。

山内による後期末 この式（吉胡貝塚出土後期末 B 型式土器：引用者註）と同様巻貝の沈線ある土器は関東地方には無いが、畿内の宮瀧式、これに併行する岡山方面の土器（福田 K3 式）に一般的である。尚ここで注意して置きたいのは宮瀧式が晩期ではなく、後期の

終末に位する理由である。宮瀧遺跡にはこの式以外の晩期のもも出て居るが、末永雅雄氏（奈良県史蹟報告十五冊）のいわれる宮瀧式は巻貝の沈線又は扇状圧痕を有する土器のみを指しているのである。一方同県の櫃原遺跡の土器は何型式かに細分し得るであろうが、亀ヶ岡式の前半のものを伴出し、宮瀧式を含まない。従って宮瀧式は晩期以外即ち以前であるべき筈である。宮瀧からは櫃原に無い磨消縄紋上に瘤を有する土器を出しておるが、これは関東北の後期終末頃の特徴であり、宮瀧式の年代を暗示するものと考えられる。（山内 1952：114〈註2〉）

伊川津貝塚の調査（1949 年）と吉胡貝塚の調査（1951 年）それぞれの所見から、宮瀧式が安行 2 式より下層から発見され、およそ安行 1 式並行であることが判明していたからである（重要なので後述する）。

しかしながら、筆者は、同報文中で山内が説いた晩期編年（晩期旧 A 段階→晩期旧 B 段階→晩期中段階→晩期新段階 [前掲]）自体に関しては、直接には論評していない。山内が説いた吉胡貝塚晩期編年を再確認するならば、晩期に該当する当貝塚出土土器を旧・中・新の三段階に区分し、旧段階にはさらに二細別（A・B）を加えるものであった。これは、層位的な根拠と、伴う大洞式細別型式が明示されたもので、先史考古学上意義深いものと考えるが、東海地方の研究者には評判がよくないらしい。たとえば、とくに、晩期初頭に当たる晩期旧 A 段階の内容が支持し得ないようである（例、増子 1985、向坂 2004）。増子にしても向坂にしても、山内の東海地方在地土器型式

の認識に関して文句をいいたいようなのだが、しかし、失礼ながら、増子も向坂も縄紋晩期の意義の理解程度が低いかもしれないのである。

山内による晩期の総括が『吉胡貝塚』の第二トレンチ報文中において、つぎのようになされたが、

山内による縄紋晩期の総括 縄紋式晩期。縄紋式晩期は東北地方の亀ヶ岡式土器とこれに並行する各地の土器を指すものである。昭和初年、亀ヶ岡式又は近似の土器が、関東地方、三河方面を含む中部地方の各地に発見されること、新しく注目された。そして後には畿内（日下貝塚：引用者註）にさえ見出されるに至った。……亀ヶ岡式土器が東北において発達し、その発達の各段階において、他の地方に輸出され、そこで模倣されたという見解の妥当性は認められていった。亀ヶ岡式を輸入し模倣した地方の土着の土器の性質が問題とされ、関東地方では安行式の後半の型式が、これに当り、abcの三型式に細分されるに至った（安行式の前半の型式は安行1式と安行2式で安行2式が後期末：引用者註）。一方中部及畿内地方では無紋又は條痕の多い粗製土器を主体とする型式が考えられ、更に亀ヶ岡式の伴存は見られないが、この種の土着土器と同様又は近縁のものが中国・九州地方にも存在することが明らかとなった。かくして亀ヶ岡式とこれに並行する型式が九州に至るまで存在することが可能となると共に、晩期なる名称がこれら一連の土器に加えられ、後期から分割されたのである。

（山内 1952：119）

その中でも核心的な部分は、「亀ヶ岡式土器が東北において発達し、その発達の各段階において、他の地方に輸出され、そこで模倣されたという見解の妥当性は認められていった」である。この指摘の意味するところは、亀ヶ岡式文化圏外にも、㊦亀ヶ岡式精製土器にかかわる評価体系があり、㊧輸入品あるいは模倣品を必要とする体制が整っており、㊨輸入品あるいは模倣品を使用する環境が揃っていた、である。山内が輸入ないし模倣の現象からは、亀ヶ岡式文化圏とよく似た地方社会が、日本列島に広く、分立していたことを見通したからこそ、「縄紋式の末期、東北地方では亀ヶ岡式土器が一般的ですが、この影響と思われる土器やその他の遺物が関東にも、中部地方にも、畿内にもある。それから未だ確実ではないが、もう少し向う迄行って居るらしい形跡がある。これらは皆その地方に固有な末期の縄紋式に伴ってるのです。決して弥生式とか、古墳時代に属しては居るのではない。だから東北の石器時代の縄紋式末期即ち亀ヶ岡式に併存し、交渉を持ち得たものは、関西の弥生式でも古墳時代でもない。矢張り縄紋式、この地方の末期の縄紋式であることになる。従って縄紋式の終末は地方によって大差ないと見なければならないでしょう」（山内ほか 1936：36下）という著名な発言（いわゆるミネルヴァ論争の争点となった発言の一部）が可能であったのである。増子も向坂も、「東北の石器時代の縄紋式末期即ち亀ヶ岡式に併存し、交渉を持ち得たものは、関西の弥生式でも古墳時代でもない。矢張り縄紋式、この地方の末期の縄紋式であることになる。従って縄

紋式の終末は地方によって大差ないと見なければならぬでしょう」(前掲)という著名な発言を支えるのが、「亀ヶ岡式土器が東北において発達し、その発達の各段階において、他の地方に輸出され、そこで模倣されたという見解」であったことが、よくみえていないように思われる。より踏み込んでいえば、土器型式を制定しかつ土器型式どうしの並行関係を論定しながら(編年研究)、あわせて、土器型式を担う地方社会どうしの社会関係を考究したのが(社会考古学)、山内の研究なのであるが、それが増子にも向坂にもよくみえていなかった、というべきであろう。以下の山内の縄紋土器型式解説は、正しくは理解されていないようである。

編年学と社会考古学 縄紋式土器研究においては、一時期に属する文物の一群とは、土器型式にあたる(したがって、その土器の形態、文様、文様のつけ方、製作技術などの面で一致している一群に、一つの土器型式があてられる)。その土器型式にはまた多少の器種があり、さらに、いくつかの類型(カテゴリー)に分けられる。(山内 1972: 193-194)

編年学にかかわるのが土器型式であり、社会考古学にかかわるのが「いくつかの類型(カテゴリー)」であって、それらが精製土器、半精製土器、粗製土器を指すことは、以下の説明を読めばわかると思う。

亀ヶ岡式の精製土器・粗製土器 この型式では精製土器と粗製土器が分化している。粗製土器は深鉢形が主で縄文の加えられたものが多い(163、175)。土着的な土器と考えられる。縄文の性質

等が地方によって異っており、これを念頭において細かい地方差を考えてもよい。精製土器は土質が選ばれ、形の変化が多く、装飾が多い。これは各地でも作られたであろうが、東北の各地間でも製作地から移動されたと考えられる。(山内 1964: 149)

精製土器・粗製土器の由来 東北地方後期中頃に深鉢形粗製土器が一般化する。外面には縄文を有する。これと同時に半精製の文様ある土器(165~173、104~110)があり、両者はそれぞれ数型式の間続いている。この粗製縄文付き土器が晩期の粗製土器に、半精製有文土器の仲間が晩期の精製土器に続くのである。(山内 1964: 149)

山内の説明によれば、縄紋後期中頃の半精製土器から後半の瘤付土器の半精製土器を経て、亀ヶ岡式の精製土器に至ると認められる一方、後期中頃、外面に縄紋を有する深鉢形粗製土器が一般化し、この粗製縄文付き土器が亀ヶ岡式の粗製土器になり、しかも、その粗製土器は土着的で、さらに縄紋の違いで細かい地方差が形成される、とのことである。他方、山内は、精製土器に関して、「これは各地でも作られたであろうが、東北の各地間でも製作地から移動されたと考えられる」と述べた。土着的と判断した粗製土器と製作地から移動された精製土器をあわせて考えるならば、粗製土器が製作される所で、精製土器も製作されるというシステムを想定した、といえる。編年の単位として認められた亀ヶ岡式は、粗製土器と精製土器とで成り立ち、土器製作システム上は、亀ヶ岡式土器の製作単位は粗製土器であると見通したのである。筆

者はそれを、近年、亀ヶ岡式粗製土器＝土器製作単位論、とよぶことにしている（大塚 2005a・b、2007、2008）。

その精製土器である亀ヶ岡式土器が「東北において発達し、その発達の各段階において、他の地方に輸出され、そこで模倣された」と考えた山内は、「東北の石器時代の縄紋式末期即ち亀ヶ岡式に併存し、交渉を持ち得たものは、関西の弥生式でも古墳時代でもない。矢張縄紋式、この地方の末期の縄紋式であることになる。従って縄紋式の終末は地方によって大差ないと見なければならぬ」との結論に至ったのである。その出発が、山内が著した「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」（1930）であることも、正しく理解されねばなるまい。

山内の編年研究に異議を述べるのであれば、『吉胡貝塚』の第二トレンチ報文の熟読吟味が必要であろう。1945年以前、執拗に山内の編年研究に反対した研究者が大多数であったが、1945年以後、一転して賛成に回った研究者が続出した。その一人、後藤守一が『吉胡貝塚』の総括でつぎのように述べた。

後藤守一の謝罪 縄文式文化の次に弥生式文化がくるとして、二者がどう接触したであろうかということは従来も問題となっていたが、最近山内清男君が前から説かれていたように縄文式土器が大体に終わって弥生式土器の時代となるということが漸次に明らかになるし、しかもその終末期又は終末期に近い頃の縄文式土器が弥生式土器の母胎となっているものもあることが考えられることになった。自分は固より縄文式文化研究では門外者であったに拘

わらず、曾ては座談会とか又は他の機会に盲目蛇におじずに山内君の所説に意義を申立てたこともあり、今日では汗顔に堪えない次第と思っている。

（後藤 1952：158-159）

後藤のこの謝罪を読むと、全てが山内の見解に決したかの感を抱くが、参考にその3年前に出された曾野寿彦による学界動向をレビューした論文を紹介したい。それを読むと、どのような意見の対立があったのかよく分かるからである。

対立状況 縄文式の時代が全国略々同一時期に終末を告げたということは、今日では大体認められているようである。併し縄文式文化と弥生式文化との交替が自然的な移行であるか否かについては異説がある。杉原莊介氏、小林行雄氏等は「縄文式土器と、最古の弥生式土器といわれる遠賀川式土器との間に何等関係を認めることは出来ない。むしろ外部からの強い影響によって生じたと考える方が妥当である」と主張する。これに対して山内清男氏の「日本遠古の文化」乃至は「人類学会例会」に於ける講演によれば、「縄文式末期中に亀ヶ岡式土器が各地に分布していること、又縄文式末期の共通な現象として見られる條線を多数に伴う土器が九州に分布する等のことから、縄文式文化の終末期は各地に於いて略々同時である。又遠賀川水巻町式土器の貝殻汲線は九州縄文土器中にも見られる手法であること、あるいは抜歯の風習などは縄文末期に一般に見られる現象」である。更に「土器に関する限り縄文式土器から所謂弥生式土器へは自

然的に移行」し得るものであるという。併し八幡一郎氏によると、これに関して、「抜歯の風習、縄文式末期になると墓が一ヶ所に集まって墓地的な一区画が出来ること、磨製の石器が流行すること等はむしろ弥生式的な文化の縄文式への影響と見るべきである」。と考え、且、「縄文式文化と弥生式文化は本質的に異なるものであり、土器の製法は類似を示すとしても、土器の機能は全く異っている。更に他の要素を考えあわせればその本質的な相違に想到するであろう。」というのである。勿論山内清男氏も弥生式文化中に大陸的な要素を認めて居られるのであるが、以上が大体此の時期に関する重要な対立せる二つの考え方であって、その詳細は夫々に当たられる必要がある。(曾野 1949: 73 上・下)

『吉胡貝塚』の報告書が出されるつい3年前、「重要な対立せる二つの考え方」が並存した状況の紹介があったことが分かる。それを念頭に置くと、後藤の謝罪は、山内と対立する考え方について後藤が根拠をあげて否定し、あわせて、後藤が山内の所論に明確な賛成の根拠を述べたわけではないのである。むしろ、それは単なる阿諛追従ではなかろうかと思えてならない。後藤と同じく総括を担当した八幡一郎は、実際には、山内の見解に賛成してはいなかったのである(八幡 1952: 188-189)。だれが山内の仕事の全体を検証したのか、その妥当性が奈辺にあるのか、それを明示的に述べた書物・論述などはないのである。むしろ、1952年に刊行された『吉胡貝塚』の中に、山内への謝罪までも掲載されたために、当

該報告書が山内型式編年研究の権威付けに大きく寄与したといえよう。山内のこの後期末と晩期の区分は、1950年代中頃には、関係する地方では広く受け入れられたようである。

しかしながら、久永春男によってまとめられた吉胡貝塚における担当地区である第一トレンチ西半部と第四トレンチの調査結果では、以下のように概括され、

1. 第四トレンチ貝層下混貝細礫層の土器(宮滝式並行: 引用者注)。
2. 第四トレンチ下層貝層の土器および第一トレンチ西半区域下層貝層の土器。
3. 第四トレンチ上層貝層の土器および第一トレンチ西半区域上層貝層の土器。

かつ、1→2→3の順の変遷が報告された(久永 1952: 82-83)。久永の所見を熟読し、図や写真を熟覧すれば、「第四トレンチ下層貝層下半の土器」(第四トレンチ貝層下混貝細礫層の直上層の土器: 引用者註)中には、宮滝式並行の土器を含まずに、私見では東北後期末の第Ⅳ段階の瘤付土器(久永 1952: 76〈第三一図下一上左から2番目〉)があるといえる。また、「第一トレンチ西半区域下層貝層の土器」中には、「安行2式の瘤の伝統をつぐもの」(久永 1952: 72〈註4〉)や「安行3a式として説かれているものに類似するもの」(久永 1952: 72〈註3〉)が認められることが報告されていた。これらは、重要な層位的所見と評価しなければなるまい。そのうちの一つが(この時点では、久永は気づいていなかった〈後述〉)、宮滝式は後期末にはならない、であった。

「櫃原遺跡の土器は何型式かに細分し得るであろうが、亀ヶ岡式前半のものを伴出し、宮瀧式を含まない。従って宮瀧式は晩期以外即ち以前であるべき筈である。宮瀧からは櫃原に無い磨消縄紋上の瘤を有する土器を出しておるが、これは関東北の後期終末頃の特徴であり、宮瀧式の年代を暗示するものと考えられる」(前掲)という山内の宮瀧式後期末説の根拠は、厳密さを欠いていたことになる。むしろ、吉胡貝塚の層位的調査結果によって、宮瀧式が後期末にならないことが判明したのが真相である。

渥美半島においては、吉胡貝塚と同様に著名な伊川津貝塚の調査(1949年調査実施)では、関東後期末の安行2式帯縄紋系大波状口縁深鉢形土器(芳賀 1972:107〈挿図第八四A~A'トレンチ第9層出土土器拓影 その2-2〉)が検出され、しかも宮瀧式よりその安行2式の方が後出であることの層位的所見が得られていた(芳賀 1972:118)。報告書の刊行が大幅に遅れ、伊川津貝塚の調査所見が広く共有されることが遅れたことは、きわめては残念であった。というのも、宮瀧式よりその安行2式の方が後出であることは、当然ながら、宮瀧式が後期末の位置を占めないことになるからである。

ただし、1949年に検出された伊川津貝塚の安行2式大波状口縁深鉢形土器に関して、久永は『吉胡貝塚』の担当の報文の註で、「第一トレンチ西半区下層貝層の土器に先行する型式の土器に伴って伊川津貝塚から発見せられている」(久永 1952:72〈註4〉)と言及した。伊川津貝塚において、吉胡貝塚「第四トレンチ貝層下混貝細礫層の土器」相当の土器に伴うと発言したことに

なり、山内の宮瀧式後期末案に沿った内容といえる。また、紅村弘も、「芳賀陽氏によって発見された安行^{ママ}Ⅱ式の土器はこの宮瀧式の主体をなす最下層から出土したらしい」(紅村 1959:111)と紹介していた。久永や紅村は、当初は、関東後期末の安行2式が宮瀧式に後出するという見解を有していなかったようで、山内の権威に引きずられた結果といえようか。山内は、1964年に、編著『縄文式土器』(日本原始美術1)の中で当該例を「関東後期末安行2式土器」と明言したが、それが在地の何式に伴うかは述べなかった(山内 1964:149〈挿図28〉)。この安行2式を掲載した正式報告書『伊川津貝塚』が刊行されたのは、山内が1970年に死去したのちの、1972年であった。

ところで、滋賀県滋賀里遺跡(1948年調査実施)出土深鉢形土器は、それを掲載した『京都大学文学部博物館考古学資料目録』1(佐原・横山 1960:183〈014-a〉)では、宮瀧式包含層より上層から当時いわれていた滋賀里式とともに検出され、「文様は福島県三貫地などから発掘された晩期初頭の土器に一致する」(佐原・横山 1960:183)と紹介された。のちに、佐原眞から、滋賀里遺跡のこの深鉢形土器を晩期初頭に位置づけたのは山内であると教えられた。山内は宮瀧式を後期末としていたから、滋賀里遺跡において宮瀧式より上層出土土器が晩期に位置づけられたのは当然であったといえる。

吉胡貝塚の報告書とこの資料目録の刊行によって、宮瀧式が後期末で滋賀里式が晩期初頭という関西地方の編年的認識が形成されたといえよう。また、この資料目録で

は、「大洞 B1 式直前の型式」（佐原・横山 1960：31〈岩手県瀬沢貝塚 013-a-下右〉）と「大洞 B1 式」（佐原・横山 1960：31〈岩手県瀬沢貝塚 013 b1-左端と左から二番目（左から二番目の口縁部破片では頸部入組紋には三叉紋がともなう〉）、34〈宮城県上ノ台貝塚 013-下 3片〉）が紹介されていた。不思議なことであるが、瘤付土器第Ⅲ段階が「大洞 B1 式直前の型式」、瘤付土器第Ⅳ段階が「大洞 B1 式」になっていたのである。ここから導き出されるのは、三叉紋があれば晩期初頭という見方であるが、それは山内の宮滝式が後期末という前提の下、である。山内は、1966 年に、関東の後期末は安行 2 式であることや、関東の晩期初頭は東北大洞 B1 式に並行する安行 3a 式であることなどを学史的に解説したが（山内 1966a）、瘤付土器や宮滝式をどのように捉えていたかは、その時点でも分からない。

私たちは、広域編年における山内の後期末の認識に深刻な齟齬があることを率直に認めるべきであろう。他方、山内が広域編年にかかわって一貫して主張して来たのは、安行 2 式が後期末である（山内 1966a）、ということに私たちは気づくべきである。ちなみに、滋賀里例（佐原・横山 1960：183〈014-a〉）は、安行 2 式と瘤付土器のキメラである（大塚 1981）。厳密に言えば、当該滋賀里例は安行 2 式後半と瘤付土器第Ⅳ段階とのキメラで、編年的位置づけは後期末で、先に取り上げた伊川津貝塚安行 2 式例は瘤付土器第Ⅲ段階並行で、滋賀里例より古い編年的位置づけとなるのである（大塚 2000：269-270、322-327）。

(5)

つぎに、「亀ヶ岡式土器が東北において発達し、その発達の各段階において、他の地方に輸出され、そこで模倣されたという見解の妥当性は認められていった」（前掲）という山内の中核的な認識には、実は、重大な問題があることを論じておきたい。当該論にとっては、関東地方晩期安行 3a 式～安行 3c 式土器が東海地方にみいだされたのは、本当は不都合であったのである。さらに、関東後期末安行 2 式土器が東海地方にみいだされたのは、山内の宮滝式後期末案にとって不都合案だけではなく、当該論の立論にとって非常に不都合であったのである。そのことを順に説明したい。

山内は、1929 年に、層位と型式を駆使する先史考古学の立場を鮮明に、濱田耕作が国府遺跡出土土器にちなんで提唱した「原始縄紋土器」（濱田 1918：42〈日本発見土器手法変遷仮想表〉）が前期の一地方型式にすぎないことを明らかにするなどして、濱田のように「文化は西から」とは単純にはいえない複雑な動向があることを示唆し、最古式縄紋土器にかかわる、濱田とは違う展望を述べた（山内 1929）。翌 1930 年には、さきほどふれた「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」を著して、ここでも「文化は西から」とはいえない動向があることや、縄紋土器の終末が地方によって大差ないことを説いた。これらの二論文は、縄紋土器の年代的地方的枠組みの基礎を築いたという意味で、記念碑的論文である。

その記念碑的論文の一つ「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」において、亀ヶ岡式文化圏外にみいだされる亀ヶ岡式

精製土器ないしはそれによく似た土器資料の考古学的意味づけは、

記念碑的認識 亀ヶ岡式土器の系統的発達が奥羽に於て行われたことに間違いないとすれば、関東及び中部地方の同式又は類似の土器は、この地方から器物として輸入されたか、或はその上模倣されたものと考えられる。(山内 1930 : 155)

というものであった。

1936年に、喜田貞吉との有名な論争の、その発端となった座談会での山内の発言をみると、「縄紋式の末期、東北地方では亀ヶ岡式土器が一般的ですが、この影響と思われる土器やその他の遺物が関東にも、中部地方にも、畿内にもある。それから未だ確実ではないが、もう少し向う迄行って居るらしい形跡がある。これらは皆その地方に固有な末期の縄紋式に伴ってるのです。決して弥生式とか、古墳時代に属しては居るのではない。だから東北の石器時代の縄紋式末期即ち亀ヶ岡式に併存し、交渉を持ち得たものは、関西の弥生式でも古墳時代でもない。矢張り縄紋式、この地方の末期の縄紋式であることになる。従って縄紋式の終末は地方によって大差ないと見なければならぬでしょう」(前掲)と述べていた。

正に、「縄紋式の終末は地方によって大差ない」ことが強調されていたが、山内が「大差ない」と明言し得たのは、亀ヶ岡式と他地方との並行関係だけではなく、亀ヶ岡式との交渉関係の内実(「この地方から器物として輸入されたか、或はその上模倣されたもの」[前掲])を言い当てられたからである。交渉関係として、東北地方以外の地方にみいだされる亀ヶ岡式精製土器ある

いはそれによく似た精製土器は、そこに運び込まれたものか、さらにはそれをもとに運び込まれたところで模倣されたもののいずれかであると明言していたのである。この認識を、筆者は移入・模倣論とよぶことにしている。つぎに引用した文章は、1967年に、自選論文集(『山内清男・先史考古学論文集』3)に再録された「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」の前掲部分である。

1930年論文の再録 亀ヶ岡式土器の系統的発達が奥羽に於て行われたことに間違いないとすれば、関東及び中部地方の同式又は類似の土器は、この地方から器物として移入されたか、或はその上模倣されたものと考えられる。(山内 1967a : 126)

それをみると、「器物として移入されたか、或はその上模倣されたもの」と書かれており、原著の「輸入」が「移入」に書き換わったことが分かる。また、山内の著名かつ重要な、ミネルヴァ論争中の1936年に著された論文「日本考古学の秩序」が、1967年の自選論文集(『山内清男・先史考古学論文集』3)に再録された際にも、本来「輸入」と表現していた部分(山内 1936 : 5下)は、つぎのように「移入」と表現し直されていたのである。

1936年論文の再録 何故安行式中に亀ヶ岡式土が混ざるか、或はその混入を伴って安行式が存在するか。安行式後半は特有な土器であって、その分布は大体関東に限られて居る。そしてこの文化圏は東北の亀ヶ岡式の文化圏と並存して居り、その間に文化的交渉があった。そのために東北地方の精巧な

亀ヶ岡式土器が関東に移入され、又は模倣して製作され安行式後半に伴存するものと考えられるのである。/ 同じ様な状態は中部地方及び近畿地方にも認められる。この地方にも亀ヶ岡式土器又は類似のものが、点々と発見されて居るが、これはこの地方に通有な、無紋又は条痕の多い土器と伴出するのである。この土器は中部地方及び恐らくは近畿地方にも通ずる特有な土器であって、関東地方の安行式後半と同様、東北の亀ヶ岡式と同時代で、これと交渉を持ったことの一現象として少量の移入又は模倣された亀ヶ岡式土器を伴うものと考えられる。(山内 1967b: 147-148)

山内の学史上著名な二つの論文(1930、1936)の、根幹的主張にかかわる用語をあえて「移入」に替えたことを尊重して、亀ヶ岡式文化圏内の精製土器が他地方にもたらされ、さらには、他地方でそれをもとに模倣品が作られたという認識を、筆者は、亀ヶ岡式精製土器移入・模倣論と呼ぶ次第である(大塚 2010)。

この山内が説く亀ヶ岡式精製土器移入・模倣論は、亀ヶ岡式文化圏内では手本があってそれが模倣されて模倣品が作られる一方(「精製土器は土質が選ばれ、形の変化が多く、装飾が多い。これは各地でも作られたであろうが、東北の各地間でも製作地から移動されたと考えられる」[前掲])、他型式文化圏へ移入された手本(他文化圏にとっては優品となる)に基づいて他型式文化圏内でさらに模倣品が作られるという、いわば二元論的模倣論であるが、筆者は、亀ヶ岡式文化圏の内でも外でも、手本を模

倣して模倣品が作られるという一元論的模倣論の可能性を強調している(大塚 2010)。

二元論的模倣論では、模倣主体は亀ヶ岡式加担者と他型式加担者との二者で、また、手本にかかわる亀ヶ岡式加担者の移動も模倣にかかわる亀ヶ岡式加担者の移動も想定されていないが、筆者が説く一元論的模倣論では、模倣主体は亀ヶ岡式加担者のみで、手本にかかわる亀ヶ岡式加担者の移動も模倣にかかわる亀ヶ岡式加担者の移動も想定し得るのである。この対照的な二つの模倣論は、山内の論理からは、どちらも導き出し得るのである。だが、山内にとっては、並行型式の異所的布置(同時代的にみると、別々の地方に別々の型式が広がること)が大前提であるため、一元論的模倣論が全く想定されなかったのである。並行型式の異所的布置を大前提にするからこそ、他型式文化圏において亀ヶ岡式精製土器の模倣にかかわるのは他型式加担者となり、他型式文化圏にみいだされる亀ヶ岡式精製土器の性格を二元論的模倣論である移入・模倣論で解釈する方に収斂したのである。

さらには、山内が異所的布置を前提に二元論的模倣論に収斂したのは、「文化は西から」的先入主ないし「神武東征的文化観」的議論に反対するために(山内 1932、1939、1966b)、土器資料にのみ基づいて説明する方向に突き進んだためであると考ええる。換言すれば、亀ヶ岡式精製土器移入・模倣論は、特定の論法を否定するためという価値判断が優先されたものであって、必ずしも実証的研究とはいえない部分があると考えるのである。

もう一つ、実証的といえないのが、手本である優品の扱いである。山内の見立てで

は、亀ヶ岡式精製土器は工芸技術の粋が発揮されたすばらしい出来映えのもの＝優品を以下で確認したい。

優品の説明ア 亀ヶ岡式のような精製土器の製作には男が関係している。それは文様のつけ方が彫刻的手法になって、土器以外の木器や骨角器なんかの文様と一致してることから言えるんです。(山内ほか 1971:73)

優品の説明イ 関東の安行の普通の土器は女でしょう。関東の女ですがね、それらも東北の亀ヶ岡式をこりゃいって真似たかもしれない。亀ヶ岡式では男が木器を彫刻し、骨角器を彫刻する、そういう共通なテクニックを応用してはじめて亀ヶ岡式が出来る。女がやってもそれはできないと、そういうふうと考えられるわけです。それで亀ヶ岡式ってのは男が作った。それには非常に粘土材料を選んでいて、粘土をかわかして粉にし、その粉から選別して非常に緻密なキメ細かいものをこしらえる、そうでないと施文のとき粒が邪魔をする、そういう点をも知らない人には出来ない。(山内ほか 1971:73)

筆者は、土器製作の担い手が男/女のいずれなのかという判断は軽々には下せないだろうと考えるので、その議論は措くことにしているが、以上の引用で明らかなように、山内は工芸品としての優品の存在を認め、優品であるため評判となってそれが他地方の別型式圏に移入され、さらに模倣されたと考えるのである。亀ヶ岡式精製土器本来の型式圏から離れたところに見出される亀ヶ岡式土器は、優品そのものか、その

優品を模倣したもののどちらかなのである。亀ヶ岡式精製土器移入・模倣論では、亀ヶ岡式精製土器が唯一の優品であることがポイントなのである。

並行型式の異所的布置と唯一の優品が亀ヶ岡式精製土器であることを前提にすると、先に述べたように、亀ヶ岡式文化圏外にも、⑦亀ヶ岡式精製土器にかかわる評価体系があり、①輸入品あるいは模倣品を必要とする体制が整っており、⑤輸入品あるいは模倣品を使用する環境が揃っていた、といえるのである。日本列島に広く、亀ヶ岡式文化圏のものとよく似た地方社会が分立していたことを意味することになり、編年的な議論だけでなく、移入・模倣論によって縄紋文化の地方社会をそのように見通せるからこそ、ミネルヴァ論争の発端となった座談会での「縄紋式の終末は地方によって大差ない」という山内発言は、先史考古学としての重みを有したはずである。

だが、亀ヶ岡式精製土器を移入し模倣する側のはずの関東地方の、その晩期安行3a式精製土器が関東の以外の地である東海地方・保美貝塚にて検出されたことは、“移入→模倣”というロジックを放棄しないのであれば、亀ヶ岡式精製土器が唯一の優品であることを否定することになる。また、亀ヶ岡式精製土器移入・模倣論では、亀ヶ岡式の登場と共に優品が出現すると考えるのであるから、後期末の安行2式精製土器が関東の地を離れて東海地方・伊川津貝塚に見出されるのは、当該論にとって不都合な別の事例となることを、つぎに詳しく説明したい。

関東と東北の後期末から晩期初頭の土器の入組紋を分類するのに、横つながり（紋

様帯中で入組紋が環状に横につながる)か、あるいは、上下起点終点(紋様帯の上下端が入組紋の起点終点になる)かに基準を求めると、横つながりの入組紋だけが施紋される土器(例:図2-1、4)、上下起点終点の入組紋だけが施紋される土器(例:図2-3、6)、上下起点終点のものと横つながりのものの双方が併用される土器(例:図2-2、5)、の三種類にきれいに分類できるのである。

横つながりの入組紋だけが施紋される土器が関東地方の型式で、上下起点終点のものだけが施紋される土器が東北地方の型式で、上下起点終点のものと横つながりのものの双方が併用される土器をキメラと見立てると、関東地方と東北地方の並行型式間に、後期末(安行2式後半—瘤付土器第IV段階)と晩期初頭(安行3a式—大洞B1式)にキメラが存在することになる。そのキメラを中心にみると、関東と東北双方の型式の精製土器の頸部紋様帯間と胴部紋様帯間において、紋様上の変換が双方向的に継起的に遂行される緊密な関係すなわち対化の存在が窺えることを筆者は唱えた(大塚2000、2011b)。そのことは、図2のデータ(大塚1996)——後期末(安行2式後半〈図2-1外塚〉—キメラ〈同図-2広畑〉—瘤付土器第IV段階〈同図-3田柄〉)と晩期初頭(安行3a式〈図2-4小豆沢〉—キメラ〈同図-5二月田〉—大洞B1式〈同図-6前田〉)——で確認できるので、諸賢の検証を願いたい。

指摘すべきは、施紋原則が遵守されながら瘤付土器と入組紋系安行2式との間に紋様上の双方向の変換システムが成立していた間、同時に瘤付土器の形態借用が安行2

式側で進行したことで、図2-1~3が意味するところは、瘤付土器の形態的な同一性(頸部紋様帯と胴部紋様帯を併せ持つこと)が関東地方と東北地方に広く保持されたことである。安行3a式に先行して関東側の瘤付土器形態の借用による形態的同一性(頸部紋様帯と胴部紋様帯とを併せ持つこと)が広がり、晩期初頭においても(図2-4~6)、紋様上の双方向の変換システムとその形態的同一性が継続しているからこそ、入組紋系安行3a式小豆沢例(図2-4)が関東在地の土器として登場したのである(小豆沢例の頸部紋様は、波状入組紋とは違う安行式側の新たな紋様で、小豆沢紋様とよぶ[大塚2000])。つまり、入組紋系安行2式と瘤付土器第IV段階の場合と同様に、入組紋系安行3a式と大洞B1式にも対化がみいだせるのである。

そこで、関東地方における東北的形態の借用と紋様上の施紋原則(横つながり)の発揮(図2-1、同図-4)を斟酌するならば、東北地方における東北的形態の同一性と東北的装飾(上下起点終点)の同一性が一緒に発揮される関東地方出土土器群(〈瘤付土器第IV段階〉大塚2000:図80-1奈良瀬戸、4寺野東、〈大洞B1式〉大塚2000:図80-3奈良瀬戸、5寺野東)は、逆に、東北地方の型式そのもののはずである。山内流の移入・模倣論では、このような一群の土器は移入品および模倣品であるが、筆者は、東北的形態と東北的装飾(上下起点終点)の同一性が広く維持されるメカニズムは加担者すなわち製作者が動くことを想定するべきと考えるので、東北地方からの持ち込み品ないし関東現地生産品と考える。また、東北地方において関東地方の型式の同

一性（横つながり）が維持されている一群にも、同じような観点からの評価（関東地方からの持ち込み品ないし関東地方の型式の東北現地生産品）を与えるべきであると考え。筆者が指摘した仙台湾周辺の土器資料（大塚 2000：図 68-2 台囲 L トレンチ、3 二月田、8 台囲 B トレンチ）および岩手県山井遺跡例（林^(謙)ほか 1995：第 35 図-24）は、安行 3a 式とみる必要がある。

筆者が強調したいのは、一元論的模倣論こそ蓋然性が高い、であり、かつ、他文化圏の人びとが「こりゃいいって真似たかもしれない」という意味での優品という概念が成立しない、である。安行式の側が亀ヶ岡式土器を「こりゃいいって真似たかもしれない」とは、よくよく考えれば、亀ヶ岡式土器が他地方土器型式に対して唯一優品でなければならぬが、筆者が再検討を加えている渥美半島保美貝塚では、既述したように帯縄紋系安行 3a 式土器も大洞 B2 式土器も検出されていた。さらにいえば、保美貝塚からは安行 3c 式土器が報告されていたことを、筆者も再確認した。亀ヶ岡式精製土器を移入し模倣する側のはずの関東地方の、その晩期安行 3a 式や安行 3c 式の精製土器が関東の以外の地で検出されたことは、亀ヶ岡式精製土器が唯一の優品であることを否定することになる。

しかも、亀ヶ岡式精製土器移入・模倣論では、亀ヶ岡式の登場と共に優品が出現すると考えるのであるから、後期末の安行 2 式精製土器が関東の地を離れて東海地方の伊川津貝塚に検出されたのは、当該論にとって不都合なさらに別の事例である。くだんの伊川津貝塚出土安行 2 式土器に関して、帯縄紋系安行 2 式に固有のクセがはっ

きりと確認で来ることから（大塚 2000：269-270、322-327）、安行 2 式土器製作者の手になるものと考えざるを得ない。吉胡貝塚の瘤付土器第Ⅳ段階（先述）の他に、東海地方には、三重県森添遺跡に瘤付土器第Ⅲ段階（奥・御村・田村 2011：87〈第 57 図異系統土器実測図-340〉）がある。後期末の安行 2 式と瘤付土器第Ⅳ段階のキメラ土器（安行 2 式の 4 単位の波頂を有する器形で頸部胴部に瘤付土器第Ⅳ段階の起点終点の入組紋（三叉紋がともなう）が配される）が、関西地方の滋賀里遺跡にある（佐原・横山 1960：183〈014-a〉）。また、関西地方の奈良県西坊城遺跡の報告書での個体識別と作図が正しければ、紋様帯中下段に安行 3a 式の横つながりの入組紋が配され上段に大洞 B1 式の起点終点の入組紋が配されるキメラ土器（岡田 2003：74〈第 63 図-552〉）があることになる。

そのような東海・関西の後期末・晩期初頭状況（在地型式圏における異系統土器およびキメラ土器の出現）を俯瞰するならば、保美貝塚出土土器資料中に、安行 3a 式帯縄紋系大波状口縁深鉢形土器である 31 [67]（小林ほか 1966：3〈第 3 図 土器拓影-18〉）や、大洞 B2 式小波状口縁深鉢形土器である 33 [69]・35 [70]（小林ほか 1966：3〈第 3 図 土器拓影-5・6〉）が存在したことの評価は、それぞれ製作者の移動ないし現地製作を想定した議論こそが必要と考えるのである。

要するに、「文化は西から」的的先入主ないし「神武東征的文化観」的議論を排除することを最優先として、土器だけで説明する論法を山内が腐心した結果が、亀ヶ岡式精製土器移入・模倣論の構築であったと考え

る。「文化は西から」的先入主ないし「神武東征的文化観」的議論の排除は今日的にも大事なことであるが、しかし、土器資料の蓄積から判断すると、山内の視野に入らなかった複数地方・時期の異系統土器やカメラ土器の東海地方・関西地方における登場を重視するならば、関東地方や東北地方から東海地方や関西地方への人びとの移動をも想定した交流を検討することが促されているといえよう。その場合にでも、先入主である「文化は西から」ではない文化事象を大いに指摘できるのである。

(6)

それでは、保美貝塚安行 3c 式土器二例 [75・76] ([小林ほか 1966 : 3 <第 3 図 土器拓影-4>]・[小林ほか 1966 : 3 <第 3 図 土器拓影-3>]) の意義はどのようなものであろうか、その点に踏み込んでみたい。

順に説明していくことにする。吉胡貝塚の晩期旧 B 段階では、粗製土器（器面調整はさまざま）が大部分である、と山内は指摘した（山内 1952 : 120）。そして、僅少な土着紋様土器の紹介のあと、異系統土器として、大洞 BC 式や、富山県方面とつながりのある土器をあげ、さらには、関東とつながりのある土器を取り上げた。それに続けて、土着紋様の土器と関東からの異系統土器については、以下のような説明がなされた。

晩期旧 B の土着紋様の土器 土着の文様としては沈潜の狭い文様を有するものが僅かある（挿図四七 29-40）。（挿図四五 8 図版三七下段右）の文様も器形が変わっているが特有なものに入るであろう。（山内 1952 : 120）

晩期旧 B の異系統土器（関東） 同図 27・28（挿図四七：引用者註）は関東の安行 3b 式位に似ている様でもある。（山内 1952 : 120）

つぎに晩期中段階では、山内は、やはり粗製土器（器面調整はさまざま）が大部分で、しかも、土着紋様が希少な点を指摘した（山内 1952 : 121）。異系統土器としては、大洞 C1 式（図版四三上段中央部下段右下及挿図四五 11）を取り上げ（山内 1952 : 121）、さらに以下の土器を紹介した。

晩期中の異系統土器 文様帯が三重にあり、口端に突起のあるものがある（図版四三上段右下、挿図四八 22）。突起下の文様は越中朝日貝塚、近江滋賀里、関東安行 3 式の中に近似があるかも知れない。（山内 1952 : 121-122）

今や東海地方の研究者も言及しない『吉胡貝塚』の晩期旧 B 段階や晩期中段階であるが、晩期旧 B 段階で注目したいのは、大洞 BC 土器（挿図四七 25、図版第三七下段上中央）および「関東の安行 3b 式位に似ている様」な土器の一例（挿図四七 27、図版第三七下段上右から二番目）と、そして、土着紋様の土器（挿図四五 8、図版第三七下段右）である。それぞれ、図 3-2 と同 3、同 4 に転載する。晩期中段階では、さらに、異系統土器（挿図四八 22、図版第四三上段右下）に着目し、それを図 3-6 に転載し、あわせて、伴出の大洞 C1 式土器（挿図四八 21、図版第四三上段右上）を図 3-5 に転載する。

晩期中段階の図 3-6 は、口縁部の形態は緩い波状口縁で波頂部が二頭状の下に三叉紋が施され、胴部には I 字状の三叉紋や、波頭状の三叉紋があることから、安行 3c

式を想起させる特徴をあわせ持つ例となる。しかも、土版・土偶および石刀・石剣類によくみられる I 字状の三叉紋が吉胡貝塚にみいだされたことなるので、忘れてはいけないことである。

1965 年の保美貝塚の調査で安行 3c 式が確かに報告された（小林ほか 1966：7）。残念ながら誤植があるようで、文面からはどの土器かは判然としないが、実際に資料をみると、二点が安行 3c 式といえる（小林ほか 1966：3〈第 3 図 土器拓影-3・4〉）。研究報告（大塚編 2011a・b）の土器个体番号-[75]・[76] が該当する。それを図 3-7（[76]）・8（[75]）に転載する。7 は広口壺のような深鉢形土器で、膨らんだ部分に上下に相對する弧線紋が連続し（残存部にはかすかに縄紋施紋がうかがえる）、また、図をみれば分かるように、弧線紋間に三叉紋を伴う入組紋が配置される。8 は、緩い波状口縁部で波頂は押圧が加わり二頭状を呈する。先にみた吉胡貝塚の晩期中段階例（図 3-6）とよく似た波頂部形態であろう。その波頂部に向かうように、二重の弧線紋が配される（右側の方も二重である）。下方左側には一本の上向きの弧線紋がみえるが、右側は分からない。中央には弧線紋の末端が入組状につながる紋様がある。

ということは、晩期中段階には、関東の安行 3c 式が東海地方に広がったことを想定する必要がでてくるのである。図 3-3 が「関東の安行 3b 式位に似ている様」な土器であるという指摘を尊重するならば、そして、筆者が指摘した安行 3a 式土器が保美貝塚に存在することも斟酌すれば、関東の安行式土器は、後期以来、継続的に流入していると考えられるべきなのである。

ただし筆者が小論でこれまで指摘したのは、安行 3a 式の帯縄紋系大波状口縁深鉢形土器の存在である。安行 3a 式の精製土器には入組紋系（横つながり入組紋）精製土器が別に存在するので（大塚 1995、1996、2000）、保美貝塚、伊川津貝塚、吉胡貝塚などをみわたすと小破片でそれらしきものは散見されるようであるが、また、東北後期瘤付土器以来の伝統である起点終点の入組紋と関東後期安行式以来の伝統である横つながり入組紋との別があるので、断定的な発言は控えていた。ちなみに、たとえば、伊川津貝塚の起点終点の入組紋を有する土器（芳賀 1972：111〈挿図第八七 A～A'トレンチ第 6 層出土土器拓影 その 1-2〉）は大洞 B1 式で、吉胡貝塚例（山内 1952：116〈挿図第四六-16〉）は入組紋から判断して大洞 B2 式といえるが、紅村が愛知県大ノ木包含地遺跡の「安行 3A 式に比較できるもの」（紅村 1969：88）という口縁部破片が、大洞 B 式の可能性もあるので、本当に安行 3a 式なのかはわからないと考えてきた。

幸い、安行 3a 式の入組紋系波状口縁土器の代表的な小豆沢貝塚例（図 2-4）の、口縁部の紋様構成を写したと考えざるを得ない三角形刳込紋を有する櫃原式紋様土器が保美貝塚から検出されていた（小林ほか 1966：3〈第 3 図 土器拓影-20〉；大塚編 2011a・c：41〈図 2 保美貝塚出土縄紋土器-27〉）。それを、図 3-1 に転載する。三角形刳込紋の底辺部には刻紋が並び、三角形刳込紋の頂部の上には円形凹点紋が付随する。三角形刳込紋の底部に刻紋が並び、頂部の先に円形凹点紋が配されることは、櫃原式紋様土器では通有なことである。本

例により、入組紋系安行 3a 式土器の存在は確実と考えたが、最近再報告された鳥取県大坪大縄手遺跡のおかげで、さらに、入組紋系安行 3a 式土器が東海地方にあるとみてもかまわないことを確信した。濱田竜彦の再報告によれば、大坪大縄手遺跡から入組紋系安行 3a 式土器が検出されていたのである（濱田 2010）。その土器や関連資料を図 4 に転載しておく。ただし、資料を再報告した濱田は、1 と 3 の両方を大洞 B1 式の壺形土器とみなすが、3 こそは、横つながら入組紋から判断して、正に安行 3a 式である。それとは別に、注目すべき所見がある。1~4 が C7・8 区土器溜り出土で、5~7 が C9 区土器溜り出土で、前者と後者は間層を介して上下関係があることの確認がなされていることが報告されたことである。ただし、濱田本人は前後関係で捉える必要がない旨を強調していた（濱田 2010：124 左）。

大坪大縄手遺跡の入組紋系安行 3a 式土器の件は、当該式がかなり広がったことを想定できる重要土器であると判断して、東海地方にみられる三叉紋を有する土器には、大洞 B 式だけではなく、入組紋系安行 3a 式土器があると考えられる。伊川津貝塚には典型的な安行 2 式帯縄紋系大波状口縁深鉢形土器があることとあわせると、安行 2 式以来安行 3c 式くらいまでの関東との関わりを念頭において、東海地方の土器資料を見直すべきである。

大坪大縄手遺跡 C7・8 区土器溜りは、在地系土器群に大洞 B1 式土器（図 4-1）と入組紋系安行 3a 式土器（図 4-3）が共伴する点で重要だが、檀原式紋様土器（図 4-2、4）が伴うことでも興味深い（4 は、二つの三

角形刳込紋が底辺部で向かい合って対になる例である）。筆者は、末永雅雄に倣い（末永ほか 1961）、三角形刳込紋による沈刻部で形成される陽刻部に各種沈線紋が配されるものを檀原式紋様土器とよび、その編年的位置を後期末・晩期初頭と考え、大洞 BC 式やそれ以降にはならないと主張してきた（大塚 1995、2000）。C7・8 区土器溜りの内容は筆者の見立てにそった内容と考える。そこで C7・8 区土器溜りの土器と C9 区土器溜りの土器に時期差を認めるならば、図 4-5~7 は、檀原式紋様土器から三角形刳込紋がぬけたような幾何学的構成の土器と考えられる。つまり、檀原式紋様土器は三角形刳込紋がぬけるような変遷過程を想定できる点でも、大坪大縄手遺跡のデータは重要と考える。

晩期旧 B 段階の図 3-4 は、幾何学的構成の沈線紋の間に弧線紋が加わり、その弧線紋にそって刻紋が並ぶ。その弧線紋に三角形刳込紋の底部がくるように配されれば檀原式紋様土器であろう。逆にいえば、檀原式紋様土器から三角形刳込紋がぬけた土器が、この 4 と考えられるのである。保美貝塚出土土器である図 3-9（小林ほか 1966：7〈第 7 図 土器拓影-2〉；大塚編 2011a・b：44〈図 5 保美貝塚出土縄紋土器-81〉）は、緩い波状口縁をもつ広口壺形土器で、図 3-4 とよく似た器形である。9 の方は、二本の縦沈線が重層する水平な沈線紋間に配されるものである。編年的な問題としては、大洞 BC 式を伴う 4 よりこの 9 の方が後出と考える理由をつぎに述べたい。

遠方でやや心許ないが、図 3-9 の胴部の紋様構成とよく似た土器として、図 5-10 の、神奈川県杉田遺跡から検出された杉田

A 類に含まれる壺形土器（杉原・戸沢 1963:43〈第 15 図 杉田遺跡出土の土器実測図-4〉）をあげたい。この杉田例は、同遺跡出土の安行 3d 式土器（図 5-8・9）や大洞 C2 式土器（図 5-11）と一緒に考えられているようである。しかし、杉田遺跡には量は少ないが安行 3c 式もあるので、杉田の壺形土器が安行 3c 式に伴う可能性も否定はできないだろうが、杉田例（図 5-10）を安行 3c 式ないし安行 3d 式くらいの時期に位置づけることは問題ないであろう。

となれば、保美貝塚例（図 3-9）が安行 3c 式土器（図 3-7・8）の段階かあるいはより後出か、そこまでは特定できないが、杉田 A 類壺形土器例に類似する保美貝塚例が図 3-4 の吉胡貝塚例に後出すると考えることには問題ないであろう。東海地方において、図 3-1 → 同 4 → 同 9 という変遷、すなわち、櫃原式紋様から三角形刳込紋がぬけ、幾何学的構成の沈線紋土器が出現し、重層水平沈線紋間に縦区画紋が配されるものに移行する動きがあるように思われるのである。そうであるならば、幾何学的構成の沈線紋を特徴とする、図 5-7 の杉田 E 類に含まれる鉢形土器（杉原・戸沢 1963:33〈第 9 図 杉田遺跡出土の杉田 D 類土器（上）と E 類土器（下）-238〉）は、杉田 A 類の図 5-10 の壺形土器の前段階に位置づけられよう。ちなみに、杉原・戸沢（1963）報告以来、図 5-10 自体を大洞 C2 式と考える向きもあるが、筆者はそう思わないことを強調しておく。

今後の研究を考えて、櫃原式紋様土器研究を展望しておく必要があるだろう。くりかえすが、筆者は三角形刳込紋を基調すると櫃原式紋様土器を後期末・晩期初頭に位置づ

けてきた。東海地方では、たとえば、岐阜県北裏遺跡（林^(桂)ほか 1973）の櫃原式紋様土器（図 5-1・2、4）や同県馬見塚 i 地点（増子 1981）の当該土器（図 5-6）を、そのようにみている。付言すれば、当該土器は大洞 BC 式および後出の時期には位置づけられないとも主張してきた。

筆者は、大坪大縄手遺跡の C7・8 区土器溜りと C9 区土器溜りの違いを念頭におきながら、櫃原式紋様土器の定義的紋様である三角形刳込紋（図 3-1）に注目し、それがぬけた幾何学的構成の沈線紋土器の変遷を考えてみた。それに基づくならば、茨城県東浦遺跡（鈴木 1985）の土器（図 5-3、5）の位置づけを質すことも可能である。図 5-3 は、三角形刳込紋の頂部に円形凹点紋をもち、それは、保美貝塚例（図 3-1）の三角形刳込紋と頂部の円形凹点紋に近いであろう。図 5-5 は、おそらく、三角形刳込紋がぬけた、凹点を伴う幾何学的構成の沈線紋土器とみなせるであろう。すなわち、図 5-3 は、安行 3a 式の時期である。他方、同 5 は小片なので特定は難しいが、編年的位置づけに関しては、関東地方の層位的事例を検討した鈴木加津子の所見（鈴木 1985:263-267、271-272）で問題ないであろうと考え、より後出の安行 3b 式の時期に位置づけたいと思う。ただし、図 5-3 の方は、安行 3a 式の時期なので、鈴木による大洞 C1 式という位置づけ（鈴木 1985:258-260、271-272）は誤りである。誤認の原因はいろいろあるが、とくに鈴木が『吉胡貝塚』を具体的な検討材料に挙げていないことが、編年に関する大きな瑕疵につながったと考える。

関東の、東浦二例と先に分析した杉田二

例の様相からは、櫃原式紋様土器の三角形剥込紋がぬける変遷が東海地方を越えて東日本にもみいだされ、日本列島のかなり広範囲でよく似た変遷が共有されているように思われるのである。

(7)

ここで、山内の吉胡貝塚晩期編年および提示された土器資料の今日的評価を考えてみたい。

まずは、晩期旧 B 段階では、三角形剥込紋で定義される櫃原式紋様土器に後続する土器 (図 3-4) が提示されていた、といえよう。そして、晩期中段階では、安行 3c 式土器の存在を予見していた、といえる (図 3-6)。実際に、本学教員による 1965 年の保美貝塚調査では、安行 3c 式土器がみいだされたのであった (図 3-7・8)。吉胡貝塚例 (図 3-6) は、その後、検討の俎上にあがった様子がないが、胴部にみられる I 字状の三叉紋は土版や土偶や石刀・石剣類によくみられるものだけに、本例が東海地方にあることは注目しておくべきであったのである。

また、入組紋系安行 3a 式土器の存在も認めてよさそうなので、山内が指摘した安行 3b 式土器 (図 3-3) および水神貝塚の安行 3b 式土器、さらには、安行 3c 式土器を予見していたといえる土器 (図 3-6) と本学調査による安行 3c 式土器 (図 3-7・8) などをあわせて考えるならば、東海地方のみならずより以西の地方も射程に入れて、晩期関東系三叉紋土器 (安行 3a 式、安行 3b 式、安行 3c 式) の流入をより主題化して考える必要があろう。ただしその場合に、筆者は、『吉胡貝塚』の第二トレンチ報文中に

ある、山内の有名な縄紋晩期の総括 (前掲) で述べられたところの亀ヶ岡式土器が持ち込まれたりさらに模倣されたりするコンテクストを強調する移入・模倣論とは違う視点——二元論的模倣論である移入・模倣論ではなく、一元論的模倣論の構えでの移入・模倣論の脱構築——で考えてみたいのである。

後期安行式の場合、帯縄紋系安行式精製土器と入組紋系安行式精製土器は、それぞれ特定の紐線紋土器製作者集団——前者精製土器は凹紐線紋土器 (= 付点紐線紋土器) 製作者集団が担当、後者精製土器は凸紐線紋土器 (= 紐線貼付紋土器) 製作者集団が担当——が製作した可能性が高いと考えてきた (大塚 2000、2002、2005a・b、2007、2008)。伊川津貝塚の帯縄紋系安行 2 式大波状口縁深鉢形土器は、すでに指摘したように、製作技法上のクセが関東でみいだされる安行 2 式の場合と同じである (凹紐線紋土器 (= 付点紐線紋土器) 製作者集団による)。製作技法上の同一性から判断して、筆者は、この伊川津貝塚例が関東から来た土器製作者集団がもたらしたもの、あるいは、移動してきた安行式土器の製作者集団が東海地方で製作したものと考え、東海地方の在地土器製作者集団の方が模倣したという議論は難しいと考える。

晩期安行式の場合、後期からの伝統である粗製土器すなわち紐線紋系粗製土器が安行 3b 式あたりから消えていくようで、以降、粗製土器が紐線紋系以外の別種のものに置き換わるが、その現象は、精製土器の製作者集団と粗製土器の製作者集団が全く異なるようになるからであると考えている。つまり、晩期安行式の場合、粗製土器

の製作者集団の方が新来の集団である可能性を考えている。したがって、安行3c式の場合、安行3c式精製土器を作る土器製作者集団は粗製土器を作らないと考えている。安行3c式精製土器の製作者集団は、関東地方では粗製土器を作らなくなったことから、見方を変えれば、移動の自由度を増した精製土器製作者集団が出現したといえるであろう。保美貝塚の安行3c式土器(図3-7・8)をみた場合、関東から来た土器製作者集団がもたらしたもの、ないしは、移動してきた安行式土器の製作者集団が東海地方で製作したことをより積極的に考えるべきであろう。当該土器製作者集団のミッションは、東海地方ないしはより以西との交流を前提に安行3c式の紋様体系を携えてくること自体であった、と筆者は想像をたくましくしている。後期および晩期安行式の場合と同様に、檀原式紋様土器やそのあとに続く土器などの広範囲な動きに関しても、持ち込まれたりさらに模倣されたりするコンテクスト(移入・模倣論)ではなく、他地方との交流のための固有のミッションを携えた土器製作者集団の動きを想定するべきであろうと考える。

(8)

要するに、1965年の小林知生による保美貝塚調査において、層位的にまとまった土器群は全く検出されず、「単一の型式とは認められず」という調査所見が正しく、増子の「晩期の第2段階に遺跡形成の中心がある」という見立ては大誤認であった。したがって、型式制定手続きに大きな瑕疵のある「保美Ⅱ式」は編年単位とはなり得ないのであるから、「保美Ⅱ式」を前提にした

議論はあり得ないのである。

では、どうするべきか。東海地方晩期研究では在地型式が狭小な分布圏を呈するという想定がかなり強いが、その認識はそれなりに大事にすべきであろう。しかし、瘤付土器や大洞式土器以外にも後期安行式土器や晩期安行式土器の登場や檀原式紋様土器の登場など、より以東からの・より以西からの各種異系統土器が交錯するのが、たとえば渥美半島の保美貝塚であり、伊川津貝塚であり、吉胡貝塚であろう。しかも、より以東からの・より以西からの各種異系統土器の交錯が東海地方全域に同じようにみられるわけでもないのであるから、特定遺跡〈点〉と特定遺跡〈点〉とを結びつける動き=ネットワーク化を復元する方向にも注意を向けるべきであろう。

ということは、そのような複雑な事象の検討を可能にするには、喫緊の課題として、正確な東海地方の晩期編年の構築が問われるのであるが、瘤付土器や大洞諸型式の編年、後期安行式および晩期安行式の編年、さらには檀原式紋様土器の編年との対比を考えながら、異系統土器出現の意味や在地型式の特性を抽出するべきであると考えられる。少なくとも、後期瘤付土器や大洞諸型式土器の場合や、後・晩期の安行式土器の場合、東海地方の類例は、当該土器製作者集団の移動によってもたらされた結果、ないしは、やってきた当該土器製作者集団の現地製作の結果であると筆者は考えており、当該土器が出土する東海地方でかつて模倣されたとは考えないのである。そのように思い至ると、山内吉胡貝塚晩期編年のコンセプト(層位と型式)とコンテクスト(亀ヶ岡式精製土器移入・模倣論)の学史的

な意義・意味を理解しつつも、移入・模倣論の脱構築を目指す筆者は、由来を異にする人びとおよび文物の交流を促進させる拠点という意味での“媒介中心性”を有する集落としての評価を保美貝塚に与えたいのである。

今日の東海地方の縄紋晩期研究の混乱ないし停滞に対して、小論が東海地方の縄紋晩期研究の本格的な立て直しに寄与することがあれば望外の幸せである。

引用文献

安藤義弘 2007「中山英司と愛知の遺跡」『伊藤秋夫先生古稀記念考古学論文集』383-536頁、伊藤秋夫先生古稀記念考古学論文集刊行会。

大塚達朗 1981「小豆沢出土安行 3a 式深鉢再考—三又紋の系譜から」『彌生』11、14-22頁。

大塚達朗 1995「榎原式紋様論」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』13、79-141頁。

大塚達朗 1996「縄文時代 土器—山内型式論の再検討より—」『考古学雑誌』82(2)、11-25頁。

大塚達朗 2000『縄紋土器研究の新展開』、同成社。

大塚達朗 2002「粗製土器から立ち上げる型式論—後期安行式を事例に—」『縄文時代』13、81-102頁。

大塚達朗 2005a「縄紋土器製作に関する理解—その回顧と展望—」考古学フォーラム 18、2-12頁。

大塚達朗 2005b「紐線紋土器と粗製土器」『アカデミア』(人文・社会学編) 80、131-165頁。

大塚達朗 2007「型式学の射程—縄紋土器型

式を例に一」『現代社会の考古学』(現代の考古学 1) 184-201頁、朝倉書店。

大塚達朗 2008「精製土器と粗製土器」『土器を読み取る—縄文土器の情報—』(縄文時代の考古学 7) 312-322頁、同成社。

大塚達朗 2010「亀ヶ岡式精製土器移入・模倣論の再考」『南山大学人類学博物館紀要』28、1-28頁。

大塚達朗 2011a「榎原式紋様土器と安行 3c 式土器からみた保美貝塚」『保美貝塚の研究』(南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告 3) 101-112頁、南山大学人類学博物館。

大塚達朗 2011b「亀ヶ岡式土器研究の今日的基礎」『縄文時代』22、119-140頁。

大塚達朗 2011c「榎原式紋様土器と安行 3c 式土器からみた保美貝塚」『保美貝塚の研究』(南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告 3) 101-112頁、六一書房。

大塚達朗・邊見秀子 2011a「序説」『保美貝塚の研究』(南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告 3) 1-10頁、南山大学人類学博物館。

大塚達朗・邊見秀子 2011b「序説」『保美貝塚の研究』(南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告 3) 1-10頁、六一書房。

大塚達朗編 2011a『保美貝塚の研究』(南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告 3)、南山大学人類学博物館。

大塚達朗編 2011b『保美貝塚の研究』(南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告 3)、六一書房。

岡田憲一 2003「包含層資料」『西坊城遺跡Ⅱ』(奈良県文化財調査報告書 90) 48-76頁、奈

- 良県櫃原考古学研究所。
- 奥義次・御村精治・田村陽一 2011『森添遺跡（第1分冊）』（度会町文化財調査報告6）、度会町教育委員会。
- 紅村弘 1959『東海の先史遺跡—三河編—』（東海叢書10）、名古屋鉄道株式会社。
- 後藤守一 1952「調査結果総括」『吉胡貝塚』（埋蔵文化財調査報告1）158-183頁、文化財保護委員会。
- 小畑頼孝ほか 1997『水神貝塚 牟呂土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書—水神地区—』（豊橋市埋蔵文化財調査報告書36）、豊橋市教育委員会・牟呂地区遺跡調査会。
- 小林知生ほか 1966「保美貝塚」『渥美半島埋蔵文化財調査報告』1-12頁、愛知県教育委員会。
- 坂口隆・奥野絵美・大竹孝平・大塚達朗 2011a「保美貝塚調査史と南山大学調査地点の意義」『保美貝塚の研究』（南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告3）13-34頁、南山大学人類学博物館。
- 坂口隆・奥野絵美・大竹孝平・大塚達朗 2011b「保美貝塚調査史と南山大学調査地点の意義」『保美貝塚の研究』（南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告3）13-34頁、六一書房。
- 坂口隆・佐野元・邊見秀子・大竹孝平・松本泰典・大塚達朗 2011a「1965年調査出土土器群とその編年的位置」『保美貝塚の研究』（南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告3）35-69頁、南山大学人類学博物館。
- 坂口隆・佐野元・邊見秀子・大竹孝平・松本泰典・大塚達朗 2011b「1965年調査出土土器群とその編年的位置」『保美貝塚の研究』（南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告3）35-69頁、六一書房。
- 佐原眞・横山浩一 1960『京都大学文学部博物館考古学資料目録』1、京都大学文学部。
- 末永雅雄ほか 1961『櫃原』（奈良県史跡名勝天然記念物調査報告17）、奈良県教育委員会。
- 杉原荘介・戸沢充則 1963「神奈川県杉田遺跡および桂台遺跡の研究」『考古学集刊』2（1）、17-48頁。
- 鈴木加津子 1985「関東北の関西系晩期有文土器小考」『古代』80、258-276頁。
- 曾野寿彦 1949「現在の日本考古学に於ける諸問題」『史学雑誌』58（4）、71-79頁。
- 芳賀陽 1972「昭和24年度の調査」『伊川津貝塚』98-154頁、渥美町教育委員会。
- 濱田耕作 1918「河内国府石器時代遺跡発掘報告」『京都帝国大学文科大学考古学研究報告』2、1-48頁。
- 濱田竜彦 2010「鳥取県大坪大縄手遺跡の縄文時代晩期土器—大洞B1式並行期の東日本系土器を伴う晩期前葉の土器群—」『古代文化』62（2）、117-126頁。
- 林桂ほか 1973『北裏遺跡』、可児町北裏遺跡発掘調査団。
- 林謙作ほか 1995『山井遺跡 縄文晩期の包含層』（一戸町文化財調査報告36）、一戸町教育委員会。
- 久永春男 1952「第一トレンチ西半区域及び第四トレンチ」『吉胡貝塚』（埋蔵文化財調査報告1）51-93頁、文化財保護委員会。
- 増子康真 1979「東三河における縄文後期末・晩期文化の再検討(I)」『古代人』35、49-56頁。
- 増子康真 1980「東三河における縄文後期末・晩期文化の再検討(II)」『古代人』36、13-25

- 頁。
- 増子康真 1981「東海地方西部の縄文文化」『東海先史文化の諸段階（本文編）補足改訂版』42-97頁、紅村弘。
- 増子康真 1985『愛知県を中心とする縄文晩期後半土器型式と関連する土器群の研究』、増子康真。
- 増子康真 2003「愛知県西部の縄文晩期前半土器型式の推移」『古代人』63、15-47頁。
- 増子康真 2004「東三河縄文晩期前半土器群の編年再編」『古代人』64、10-38頁。
- 増子康真 2011「愛知県東部の縄文後期末～晩期初頭土器の編年—伊川津1972年報告の再検討を基礎として—」『縄文時代』22、95-118頁。
- 向坂鋼二 2004『三遠後晩期縄文土器研究の今昔』（三河考古学会講演会資料）、三河考古学会。
- 八幡一郎 1952「吉胡貝塚調査の意義」『吉胡貝塚』（埋蔵文化財調査報告1）184-192頁、文化財保護委員会。
- 山内清男 1929「関東北に於ける繊維土器」『史前学雑誌』1(2)、117-146頁。
- 山内清男 1930「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』1(3)、139-157頁。
- 山内清男 1932「日本遠古の文化 三 縄紋土器の終末 四」『ドルメン』1(7)、49-53頁。
- 山内清男 1936「日本考古学の秩序」『ミネルヴァ』1(4)、137-146頁。
- 山内清男 1937「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』1(1)、29-32頁。
- 山内清男 1939『日本遠古之文化』（補註付・新版）、先史考古学会。
- 山内清男 1952「第二トレンチ」『吉胡貝塚』（埋蔵文化財調査報告1）93-124頁、文化財保護委員会。
- 山内清男 1964「縄文式土器・総論」『縄文式土器』（日本原始美術1）148-158頁、講談社。
- 山内清男 1966a「縄紋式研究史における茨城県遺跡の役割」『茨城県史研究』4、1-12頁。
- 山内清男 1966b「画竜点睛の弁 上下」成城新聞9月24日・12月5日（『山内清男・先史考古学論文集・新』1、1-6頁、先史考古学会）。
- 山内清男 1967a「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『山内清男・先史考古学論文集』3、113-128頁、先史考古学会。
- 山内清男 1967b「日本考古学の秩序」『山内清男・先史考古学論文集』3、143-153頁、先史考古学会。
- 山内清男 1972「縄紋時代研究の現段階」『山内清男・先史考古学論文集・新』5、193-214頁、先史考古学会。
- 山内清男ほか 1936「日本石器時代文化の源流と下限を語る—座談会—」『ミネルヴァ』1(1)、34-46頁。
- 山内清男ほか 1971「山内清男先生と語る」『北奥古代文化』3、59-80頁。

図の出典

- 図1：山内（1937）文献より
 図2：大塚（1996）文献より
 図3-1、7～9：大塚編（2011a）文献より
 同図3-2～6：山内（1952）文献より
 図4：濱田（2010）文献より
 図5-1・2、4：林（桂）ほか（1973）文献より
 同図-3、5：鈴木（1985）文献より
 同図-6：増子（1981）文献より
 同図-8～11：杉原・戸沢（1963）文献より

【後 記】

小論は、2011 年度に、南山大学人文学部
より筆者に与えられた特別配分研究費によ

る研究成果の一部であることを明記する。

(2012 年 1 月 31 日)

(南山大学人文学部教授)

Angyo-3c-type Pottery from Hobi Shell Mound

OTSUKA Tatsuro

An excavation of Hobi Shell Mound was carried out by Prof. KOBAYASHI Tomoo of Nanzan University in 1965, then, a report was published in the following year. The report suggested that fragments of Angyo-3c-type pottery, a type of Final Jomon pottery from Kanto area, were also found at the same site. Because of some problem of description, it was uncertain which fragments would be those of Angyo-3c; the situation probably caused that the finding itself was forgotten by researchers. In March, 2011, the author *et al.* published *The Study of Hobi Shell Mound*, which contains re-report and revision of archaeological sources found in Hobi Shell Mound, and the author described that two fragments of upper parts of pottery should be those of Angyo-3c.

Following the revision above, this paper tries to consider the meaning of Angyo-3c-type pottery in Hobi Shell Mound. Researchers have suggested that pottery found long away from the original area, such as Kamegaoka-type pottery, could be explained that pottery was imported, then, imitated in the newly introduced area (Import-imitation Theory). Concerning the case of Hobi Shell Mound, the author, not following the theory mentioned above, suggests that the pottery would be introduced by craftsmen of Angyo-3c themselves who came from Kanto area to Tokai area, or, such a group from Kanto made the pottery in Tokai area. The author also raises a new hypothesis that the coming of craftsmen of Angyo-3c-type pottery to Tokai area means that they tried to have associations with those who were living in areas from Kanto westward.

縄紋土器型式の大別

	渡島	陸奥	陸前	關東	信濃	東海	畿内	吉備	九州
早期	住吉	(+)	槻木 1 〃 2	三戸・田戸下 子母口・田戸上 茅山	曾根? × (+)	ひじ山 粕畑		黒島 ×	戦場ヶ谷 ×
前期	石川野 × (+)	圓筒土器 下層式 (4型式以上)	室濱 大木 1 〃 2 a,b 〃 3-5 〃 6	蓮田式 花積山 黒濱 諸磯 a,b 十三坊臺	(+) (+) (+) 跡場	鉢ノ木 ×	國府北白川 1 大歳山	磯ノ森 里木 1	轟?
中期	(+) (+)	圓筒上 a 〃 b (+) (+)	大木 7a 〃 7b 〃 8 a,b 〃 9, 10	御領臺 阿玉臺・勝坂 加曾利 E 〃 (新)	(+) (+) (+) (+)			里木 2	曾畑 阿高 出水 }?
後期	青柳町 × (+) (+)	(+) (+) (+)	(+) (+) (+)	堀之内 加曾利 B 〃 安行 1, 2	(+) (+) (+) (+)	西尾 ×	北白川 2 ×	津雲上層	御手洗 西平
晚期	(+)	龜ヶ岡式 (+) (+) (+) (+)	大洞 B 〃 B-C 〃 C1,2 〃 A,A'	安行 2-3 〃 3	(+) (+) (+) 佐野 ×	吉胡 × 〃 × 保美 ×	宮瀧 × 日下 × 竹ノ内 × 宮瀧 ×	津雲下層	御領

註記 1. この表は假製のものであつて、後日訂正増補する筈です。
 2. (+)印は相當する式があるが型式の名が付いて居ないもの。
 3. (×)印は型式名でなく、他地方の特定の型式と關聯する土器を出した遺跡名。

図1 山内清男による縄紋土器型式編年研究「縄紋土器型式の大別」(1937)

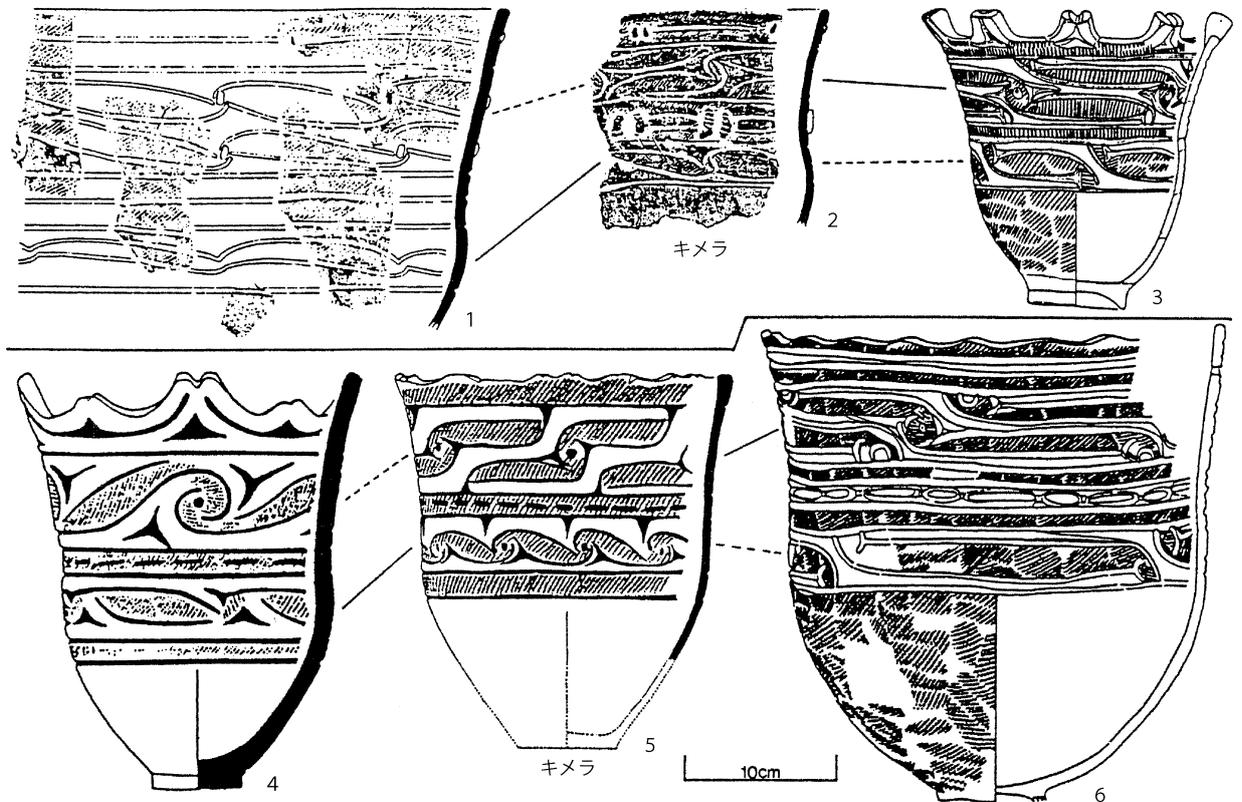
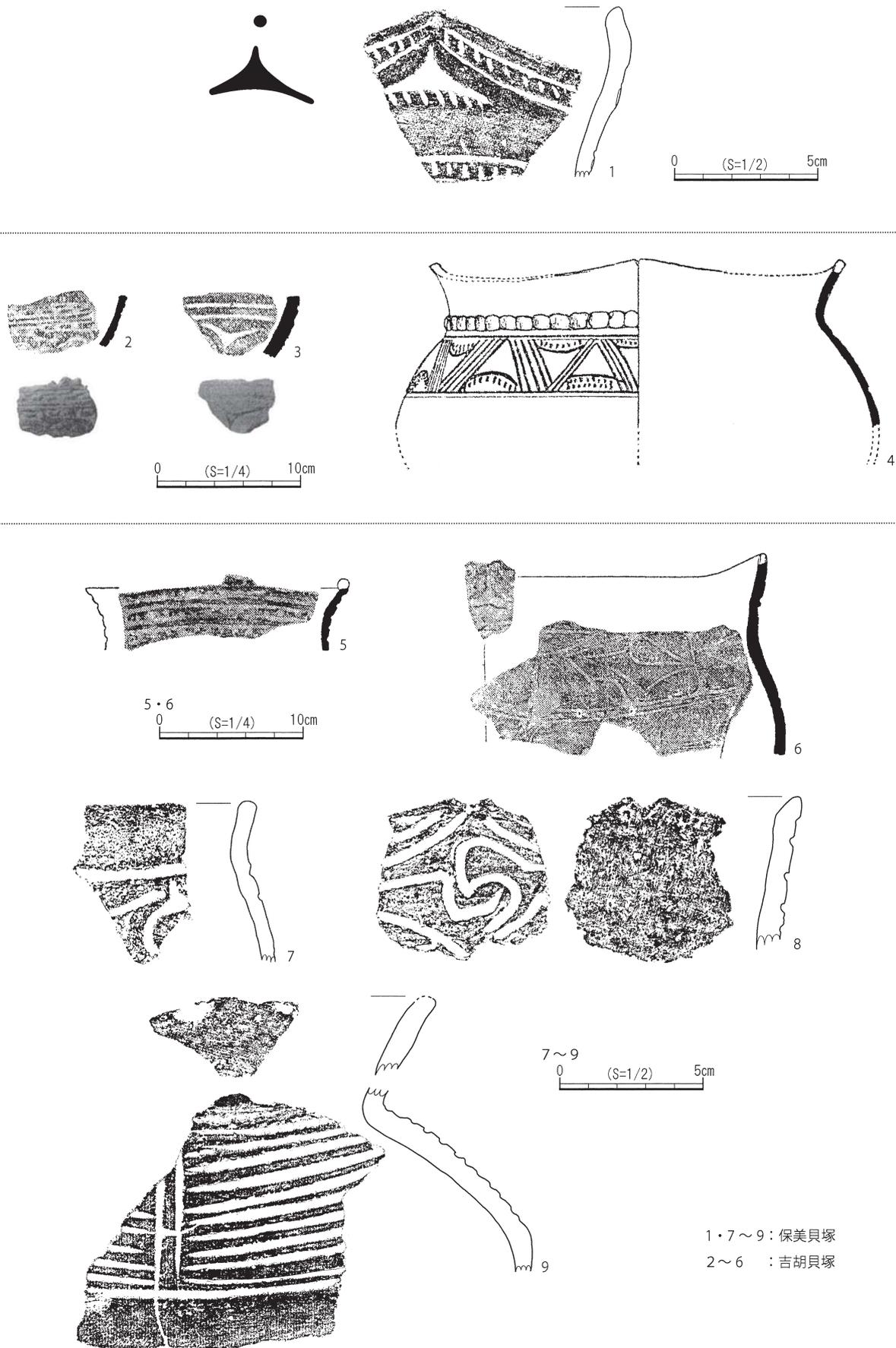
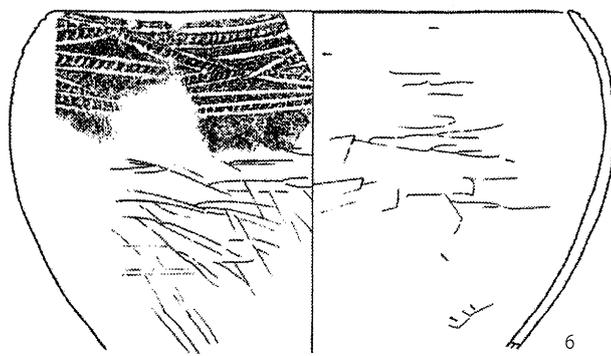
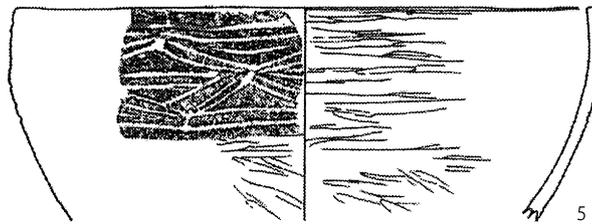
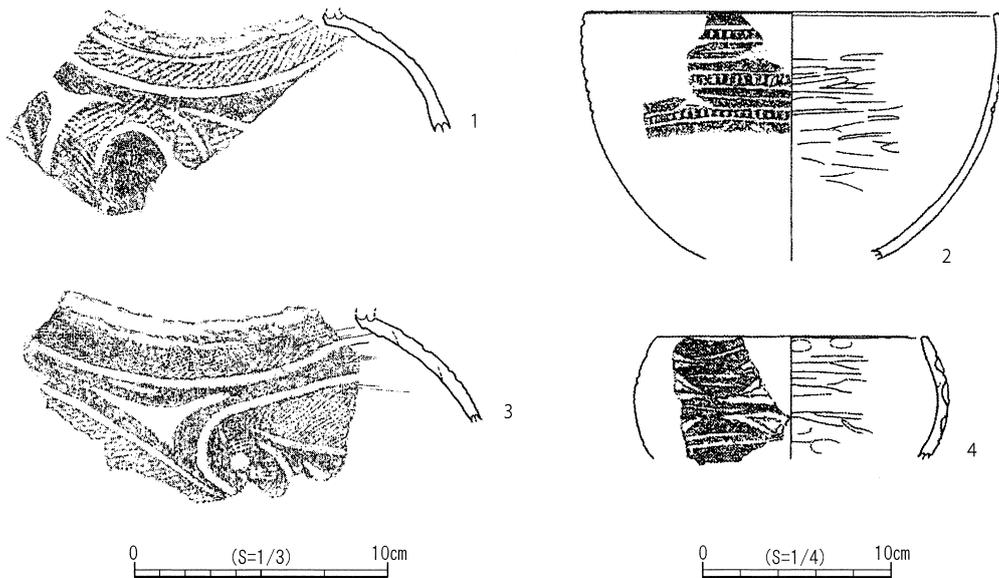


図2 横つながり入組紋(1外塚、4小豆沢)と起点終点入組紋(3田柄、6前田)とキメラ(2広畑、5二月田)
 [後期末安行2式: 1-キメラ: 2-窪付土器第IV段階: 3、晩期初頭安行3a式: 4-キメラ: 5-大洞B1式: 6]



1・7～9：保美貝塚
2～6：吉胡貝塚

図3 橿原式紋様(三角形刳込紋)の変遷(1)



1~7: 大坪大縄手

0 (S=1/4) 10cm

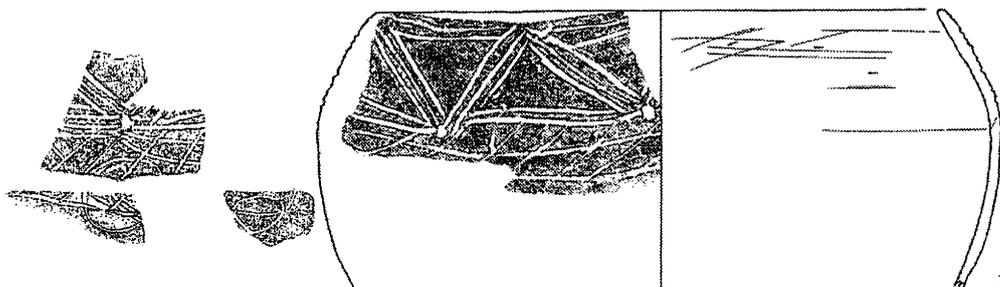


図4 橿原式紋様(三角形剝込紋)の変遷(2)

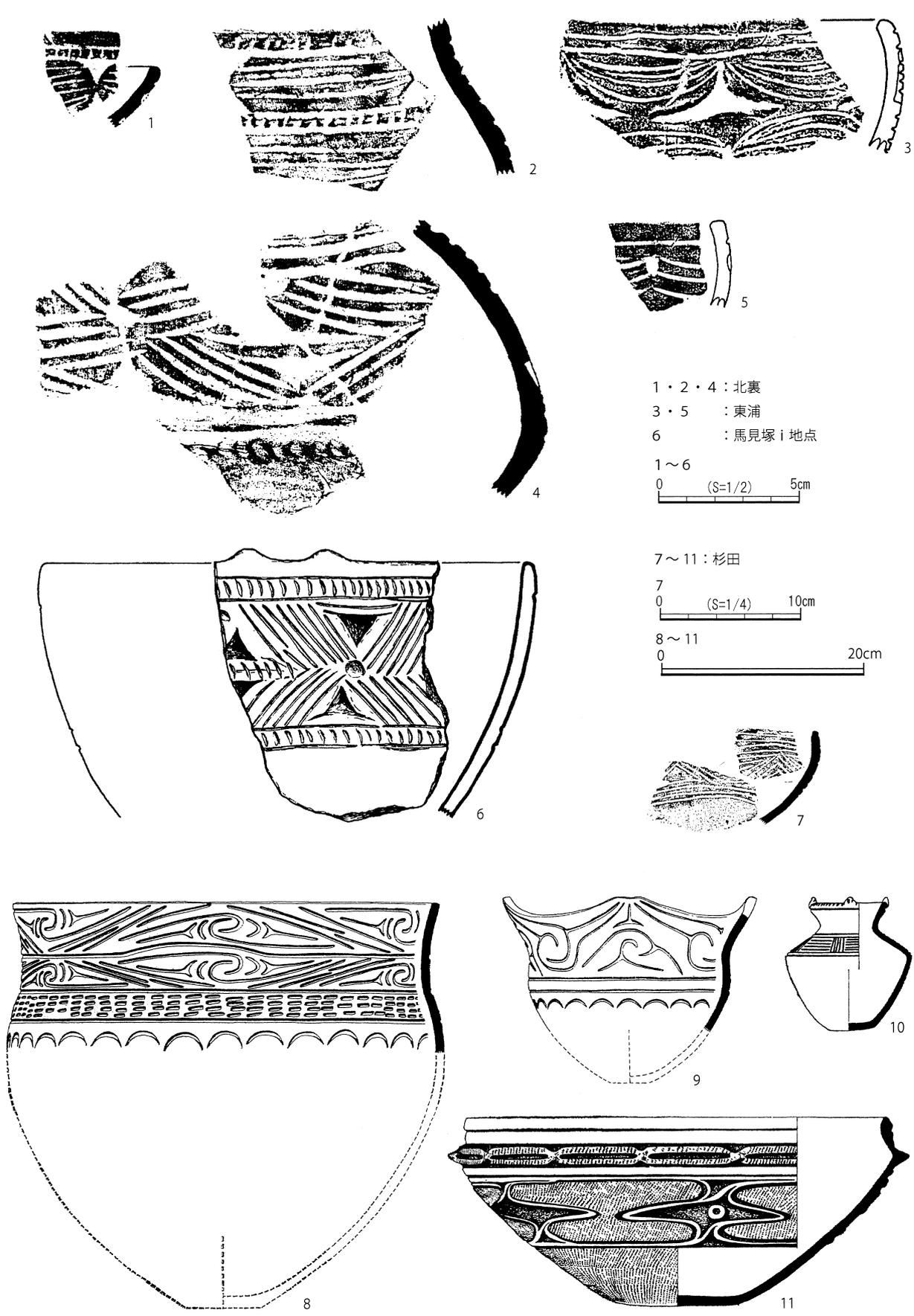


図5 櫛原式紋様(三角形制込紋)の変遷(3)

2030年、私たちのミュージアムのつくりかた

手塚 朋子

はじめに

2005年4月、日本政府の経済財政諮問会議専門調査会¹⁾は「日本が目指すべき2030年」を報告した。2030年は時代の節目として社会的に重視されている。未来年表²⁾、未来技術年表³⁾からも見てとれるように、2030年はより多くの出来事が予測されている⁴⁾。

しかし、ミュージアムにおいては、2030年をどれほど視野にいれているのであろうか？ 科学・技術系博物館では未来をテーマとした展示事例も多い⁵⁾が、ミュージアム自体が目指すべき未来像においては、いかがであろう？ 筆者は、これからのミュージアムが留意すべき3つのキーワードを以下提言していきたい。

1. キュレーション

その1つが、キュレーション。キュレーションという言葉は2010年頃からRosenbaum⁶⁾によって使われ始めた。語源はミュージアムのキュレーター（学芸員）から来ている。日本では佐々木俊尚や勝見明の著書、セブン&アイ HLDNGS. 鈴木敏文 CEO による話⁷⁾が記憶に新しい。

キュレーションの意味は「無数の情報の海の中から、自分の価値観や世界観に基づいて情報を拾い上げ、そこに新たな意味を与え、そして多くの人と共有すること」⁸⁾とされている。キュレーションを行う者

は、キュレーターと呼ばれている。モノを選別し、それに何らかの価値や意味づけをして、ヒトへ伝えていく仕事は、新旧のキュレーターに共通している。注目すべきは、新キュレーターが「つながり」を重要視していることにある。いまや耳にした音楽へスマートフォンを翳せば、題名とアーティストが明示される時代である。ミュージアムの解説もほぼ携帯に頼ることになるであろう⁹⁾。旧キュレーターも「モノ」の解説だけでなく「モノ」により発生するつながり、つまり「コト」を重視していかなければなるまい。「コト」を念頭に置いたキュレーションの参考に以下2つの文章を引用する。

世の中には本当に変わった人もいますが、その変わった人ですらも対応しようとするれば、実は予想外のおもしろい結果が生まれてきます。

おわかりいただけと思いますが、世界で有名な銘柄ものというものは、ほとんど特定の個人に向けてつくられたものでした。シャネルの5番、22番は、名前は言いませんが、あの彼女です。ダンヒルのマイ・ミックスチュアのNo. 5とNo. 95はあの彼です。このように特定の人のためにつくられたものが、やがてとても大きな広がりを持ちます。大勢の皆さんのために造ら

れたものはさっぱり人の関心を引きません。(中略)「A product for everybody is a product for nobody. (すべての人のための商品は、誰の商品でもない)」と言っています。つまり、誰をも満足させないものなのです。(井関利明 2006年『関わりと拡がりのマーケティング「ミュージアム・タウン」の創造と展望』日本ミュージアム・マネジメント学会)

環境としてのオープン・クリエーション¹⁰⁾は整いはじめており、実際多くの創造物が生まれている。YouTube や Flickr など情報共有サイトには連日膨大な数の創造物がアップされ、またクリエイティブ・コモンズに代表される創造物の共有システムなどによって、派生による新たな創造物が生まれはじめています。一般的に創造物が飛躍的に増大する場合、そのクオリティは概して低くなりがちである。その上個々の創造物は、同時に素材として見なされうるものでもある。このような状況において創造物は、完成度やコンテンツとしての整合性よりもむしろ、そのフレキシビリティ—他の創造物や情報との関係性においてその都度新たな側面に開かれる—において存在意義を持ちはじめています。ネットワークを介して情報や人々同士が自動的、偶発的に連結していくプロセスが、オープン・クリエーションの創造性を生み出しうるのである。

(四方幸子 2006年『オープン・クリエーション—PAZ (分散的テンポラ

リー・ゾーン) の実践』モバイル社会研究所)

2. 男女共同参画

2つ目のキーワードは男女共同参画である。ミュージアムにおいては、推進の場を提供することができる。男女共同参画については、内閣府に局を設置していることから、政府の重点施策であることは明らかである。男女共同参画を推進することにより、社会貢献度が高く評価され、ミュージアムの存在意義を明確にすることができる。

科学技術振興機構 (JST) が行っている「女子中高生の理系進路選択支援事業」により、国立科学博物館にて「ルーシーと私の楽しむカガクの時間」、愛媛県総合科学博物館にて「四国理系女子会 Science Girl」と題する女子中高生対象の様々なイベントが試みられている。ナイト・ミュージアム・ツアーや職業体験、紅茶やケーキを頂きながら研究者へ仕事内容やアドバイスを聞くことができる交流会など。上述においては女子中高生に限ったプログラムだが、北名古屋市歴史民俗資料館では、2001年10月19日から2002年1月30日にかけて、探してみよう暮らしのキオク「道具から見た昭和の女性史」という企画展と、これに因んだシンポジウム「男女共同参画社会アンケートと道具から見た女と男の21世紀」が開催された¹¹⁾。時代に先駆けた例と言えよう。

筆者は南山大学人類学博物館において昭和の資料に触れる機会が多いが、常日頃憂慮するのは、多くの人が昭和という少し前の社会を日本の伝統と思い込んでしまって

いる点だ。例えば「主婦」という概念は、欧米化や工業化の進んだ近代の産物であり、日本の伝統とは言いがたい。人口の多くが自給自足の生活を基盤としていた時代には、女性やこどもの勤労は当然であったはずである。また、昭和の台所家電においては、開発製造の歴史（主に男性）と対を成す利用者の歴史（主に女性）が存在し、互いの軋轢や労苦を抱えながら、社会情勢により家電が変化したり、家電が社会に変化をもたらしたりという道を歩んで来た。「伝統的だと思われているものが、実は近代の産物である」¹²⁹ という認識の上で、また男女共同参画の視点から、昭和を振り返ることにより、真の理解が可能となるのではなからうか。

3. メディア・リテラシー

3つ目はメディア・リテラシーである。類似した言葉に「ミュージアム・リテラシー」がある。菅井薫¹³⁰によるとミュージアムに関わる「リテラシー」の全体像として①博物館に対する意識、理解の向上②博物館の活用、利用支援③メディア・リテラシーを育む場としての博物館④科学（的）リテラシーを育てる場としての博物館、以上の4つが挙げられている。即ちメディア・リテラシーは「ミュージアム・リテラシー」に含まれると言えよう。

それはさておき、なぜミュージアムにてメディア・リテラシーがなされるべきなのか？

博物館という空間は、さまざまなメッセージが埋め込まれ、発信され、解読され、交換される情報の場であり、モ

ノと人、人と人を仲介するメディアである。

（村田麻里子 2011 年「博物館の論的転回—来館者研究の再構成—」東京大学大学院学際情報学府修士学位論文）

ミュージアムのメディア論については Roger Silverstone¹⁴、Eilean Hooper-Greenhill¹⁵ の著書が実践例報告もあり興味深い。

大袈裟ではあるが、ミュージアムが世界を救うことができるかもしれないという期待のもと、メディア・リテラシーによる社会への有効性を唱えた2つの文章を以下挙げて行きたい。

1995 年の NHK 国民生活調査によれば、日本人が1日にテレビを見る時間は平均3時間28分。仮に75年間このペースで過ごせば、人生のまる10年間以上をテレビだけで見て過ごす計算になる。それに加えて、新聞・雑誌、映画、ラジオはもちろん、インターネットのホームページをチェックする時間などを加えれば、私たちは人生の大半をメディアとともに過ごしている、と言っても過言ではない。情報社会への移行が加速するなか、私たちは、時間や空間を軽々と飛び越えて、地球の裏側で起こっていることを見聞したり、数世紀前の歴史上の出来事や人物についてさえ知ることができる。臨場感たっぷりのライブ中継を目にすることは、それがテレビカメラを通したものであることを忘れさせ、あたかも自分

がその場に立ち会っているかのような錯覚を覚えさせるほどだ。実際に経験したことよりも、メディアが伝えるリアリティの方が、現実味を帯びていると感じることも少なくない。メディアが媒介する情報は、世の中を理解する上での中心的な役割を果たし、私たちの考え方や価値観の形成、ものごとを選択する上でもますます大きな影響力を発揮するようになっていく。

ところが、メディアが送り出す情報は、現実そのものではなく、送り手の観点からとらえられたものの見方のひとつにしかすぎない。事実を切り取るためには常に主観が必要であり、また、何かを伝えるということは、裏返せば何かを伝えないということでもある。メディアが伝える情報は、取捨選択の連続によって現実を再構築した恣意的なものであり、特別な意図がなくても、製作者の思惑や価値判断が入り込まざるを得ないのだ。(中略)メディア社会に生きる私たちは、メディアがもたらす利点と限界を冷静に把握し、世の中にはメディアが伝える以外のことや、異なるものの見方が存在することを理解し、社会に多様な世界観が反映されるよう、メディアと主体的に関わっていく責任があるのではないだろうか。

(菅谷明子 2000 年「メディア・リテラシー—世界の現場から—」岩波新書)

現代において、イデオロギーを前提とした講座やワークショップ、すなわち博物館はすばらしいところ、えらいと

ころであり、その博物館が知識や奥義の部分を伝授してくれる場としての講座やワークショップを設けるだけでは、そのイデオロギーをよいものとして受け入れる用意のある人々しか参加はしないだろう。そしてそういう人々の数は限られているのである。

これからの博物館には、博物館の権威やイデオロギーの仕組み自体を積極的に開示し、人々が博物館をメディアとしてとらえなおすような仕掛けを盛り込んだ実践が必要となってくるのではないか。

(水越伸 2003 年「博物館とメディア・リテラシー—東京都写真美術館における表現と鑑賞をめぐる実践的研究—」東京大学社会情報研究所紀要 No. 65 東京大学社会情報研究所)

先に挙げたキュレーションや男女共同参画を展開する場合、ミュージアムはメディアであるが故の危険性を孕んでいる。ミュージアムはメディアである事を自覚し、同時にメディア・リテラシー教育を進めるべきである。しかし、時として、メディア・リテラシー教育は新鮮な感動を阻害しないか?¹⁶⁾ という懸念には、深澤直人の話を以下参照したい。

別のキーワードで、「First Wow/Later Wow」というのがあります。第一印象で「ウォ！」と思わせることは、デザインではすごく重要なファクターであると思います。でも、デザインのことを考えるにつれて、人間にとっての本当の喜びとくらべて、最初にそれを見

て「ウォ！」って喜ぶ、「First Wow」とも言えるようなことは実はたいしたことではないのではないか、と思いました。たしかにそれも重要なことだろうけど、それよりも自分を環境化したことによって感じられてくる別の価値があるはず。たとえばアートの世界でもそうですが、美術館に行ってモダン・アートを「理解」しようとするとき難しい場合があります。そこでは理解しようという意識がある。でも一瞬遅れて「あー」って思うことがありますよね。「この人はこんなことを考えていたんだ」ということ。作者の意志と受け手がシンクロする瞬間です。その時間のズレがいいなと思います。少し遅れて「ワーォ！」という驚きがある。これを「Later Wow」と名づけてみました。

(深澤直人 2004 年「デザインの生態学 新しいデザインの教科書」東京書籍)

以下は佐々木正人による【First Wow/ Later Wow】の解説¹⁷⁾である。

この言葉を提唱した深澤直人は、店やカタログや広告によって受け手にそのデザインを強く印象づけさせる一方で、そのデザイン本体の持つ力がおろそかになっている状況に警鐘を鳴らし、本来のデザインの深みは、最初の印象よりもむしろ、食にとえるなら噛んでいくうちに味が深まっていくような、作り手の意図が受け手に伝わる、最初の印象から双方の感覚が寄り合っていくわずかな時間の遅れにあるので

はないかと言っている。

おわりに

そう遠くない 2030 年。ミュージアムをとりまく将来は、少子高齢化、Sustainable Society などキーワードについては枚挙に暇ないが、あえて 3 つを選択したのは、その 3 つの相関関係と相乗効果の可能性からである。

概してミュージアムでは古い資料に触れる機会が多い。しかし時には未来に思いを馳せてみると—この古い資料の数々、そして私たちのミュージアム—その大切さがより解るのではなからうか。

注

- 1) 「日本 21 世紀ビジョン」に関する専門調査会。会長は香西泰。
- 2) 博報堂生活総合研究所、野村総合研究所 Web にて閲覧可。
- 3) 科学技術振興機構 Web にて閲覧可。
- 4) 地方公共団体においては滋賀県が 2030 年ビジョンをいち早く出している。
- 5) 国立科学博物館は企画展「エコで粋!? 自然に学ぶ ネイチャー・テクノロジーとライフスタイル展—ものづくりとくらしのあたらしい か・た・ち—」(2010 年 10 月 26 日～2011 年 2 月 6 日)において 2030 年の厳しい環境制約の中でもこころ豊かに暮らすための提案をする。
日本郵船歴史博物館は 2009 年の企画展「NYK スーパーエコシップ 2030」において、夢物語では終わらない 2030 年を目標に、論理的には可能なものの

- まだ船舶用に商業化されていない技術を盛り込む。
- 6) Steven Rosenbaum は、MTV のプロデューサーとして知られているが、ナショナル・ジオグラフィック誌や HBO、CNN、MSNBC、ディスカバリー・チャンネル、A&E、ヒストリー・チャンネル等で、長編ドキュメンタリー・フィルムも制作している。2001 年 9 月 11 日の同時多発テロを記録した『9月の7日間』で、エミー賞（ドキュメンタリー映画部門）を受賞。和訳されている著書は「キュレーション 収集し、選別し、編集し、共有する技術」田中洋監訳 2011 年 プレジデント社。
- 7) 佐々木俊尚 2011 年「キュレーションの時代—「つながり」の情報革命が始まる」ちくま新書
- 8) 「プレジデント」2011 年 7 月 18 日
- 9) すでに実用化されている AR (Augmented Reality) 技術では、ミュージアムの資料を携帯電話に写し出すと、ヴァーチャルな情報（例えば展示されているモノの動いている時の映像が重ねあわされる）が表示される。AR は拡張現実と和訳され、VR（仮想現実）と対比される。
- 10) 「オープン・クリエーション」の代表的例として四方幸子は Linux を挙げている。
- 11) 師勝町歴史民俗資料館研究紀要 2002 年、2003 年に報告が掲載。
- 12) 木村涼子 2010 年「〈主婦〉の誕生」吉川弘文館
- 13) 研究代表者 高安礼士 2009 年「科学系博物館の学校利用促進方策調査研究報告書」全国科学博物館振興財団より菅井薫「ミュージアムリテラシーとは何か」
- 14) 吉見俊哉訳「なぜメディア研究か？ 経験・テキスト・他者」せりか書房、光岡寿郎 2010 年「なぜミュージアムでメディア研究か？—ロジャー・シルバーストーンのミュージアム論とその射程」マス・コミュニケーション研究 76 日本マス・コミュニケーション学会
- 15) Eilean Hooper-Greenhill の論文は Google Scholar にて閲覧可。
- 16) 菅谷明子は著書「メディア・リテラシー—世界の現場から—」の中で、カナダのトロント市公立セダブラエ高校教師ニール・アンダーセンのメディア・リテラシー教育事例を挙げている。アンダーセン先生が「先生のおかげで、昔みたいにテレビや映画を無邪気に楽しめなくなった」と文句を言いに来る子がいるほどなんです」と苦笑するシーンが報告されている。
- 17) 後藤武 佐々木正人 深澤直人 2004 年「デザインの生態学—新しいデザインの教科書」東京書籍
(南山大学人類学博物館臨時職員)

Making our Museum in 2030

TEZUKA Tomoko

In April, 2005, the Research Committee of the Council on Economic and Fiscal Policy of the Japanese government reported on 'the should-be state of Japan in 2030' (Japan's 21st Century Vision). The year 2030 is thought to be a turning-point in Japanese society, then, how do we consider the state of museum in 2030?

The author points out three key-words, that is 'curation', 'gender equality' and 'media literacy' for the museum in future.

山の田古墳出土山茶碗の再報告

嶋田奈緒子

はじめに

山の田古墳¹⁾は、名古屋市守山区大字上志段味字山ノ田（旧東春日井郡志段味村大字志段味字山ノ田）に位置する、横穴式石室をもつ古墳である。「志段味古墳群」の東谷山麓に展開する群集墳に含まれ、庄内川が形成した段丘上に立地している。昭和27年に南山大学人類学民族学研究所が、平成21年に名古屋市教育委員会が区画整理事業に伴い、発掘調査を行なっている。現在古墳は破壊され、出土遺物は南山大学人類学博物館（以下、人類学博物館）、名古屋市見晴台考古資料館に保管されている。

本稿では、人類学博物館が所蔵する南山大学人類学民族学研究所の昭和27年調査出土の資料を再報告しようとするものである。『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』（安藤・松原ほか2007）に、当時の記録をもとに調査の概要や出土遺物が紹介されているが、今回はその中から山茶碗を再報告する。ただし、遺物に山の田古墳の注記がなかったものについては、ほかに記録もなく山の田古墳から出土した確証がないため今回は報告しない。

昭和27年の山の田古墳調査概要

昭和27年10月29日から11月10日にかけて、南山大学人類学民族学研究所により山の田古墳横穴式石室内の発掘調査が行なわれた。土地の所有者であった松原高博氏

が耕作をした際に土器を見つけ、同研究所の中山英司に調査を依頼したのが契機となったようである。調査は同研究所の伊奈森太郎、川端眞治、石井常次が主体となり、学生5人が参加して行なわれた。川端によって調査記録²⁾が残されており、調査の様子が覗える。この時の調査では鉄鍬、馬具、須恵器、山茶碗などが出土しているが、当時すでに、ほとんどの遺物が盗掘されていたようである。

出土遺物は、2012年1月時点で、人類学博物館第一展示室ケース内と地下収蔵庫に収蔵されている。また、調査委任状や写真など、調査関係資料の一部は人類学博物館に保管されているが、川端による記録原稿（原本）は所在不明である。

出土山茶碗について

器種は、碗が31点、小皿が3点である。すべてロクロにより成形されている。碗の口径はおおよそ14cm～16cmのものと、13cm台、17cm台のものに分けられる。体部の立ち上がりは、全体が直線的に立ち上がるものと、下半に丸みないし稜を帯び上半が直線的に立ち上がるものに分けられる。時期が新しいものは前者、古いものが後者に当てはまる。口縁端部は、軽く外反する。底部外面に糸切り痕が残るものがほとんどであるが、一部ナデ等による調整が認められる。9・11・14・32には、板目状圧

痕が残る。29 以外の碗には、すべて高台が付され、そのほとんどに、粉殻痕が残る。1・12・13・15・17・21・25・26・28・30 以外は、体部内面の調整に、コテないしコテ状工具が使用されている。17・26・32 には、体部内面に粉殻痕や高台痕など、重ね焼きの痕跡が残る。34 の小皿には、粘土紐の積み上げ痕とみられる痕跡が残っている。

これらの山茶碗を分類すると、尾張型山茶碗が 30 点、東濃型山茶碗が 4 点に分けられる。両型式とも、藤澤良祐氏の編年³⁾の第 4 型式から第 8 型式 (13~14 世紀頃) に相当する。山茶碗の注記や調査記録⁴⁾をもとに、出土位置をみると次のようになる。注記は、「山ノ田 No.」(玄室袖石付近出土⁵⁾)、「山田玄奥」、「山ノ田玄中層下」、「山ノ田 (山田) 玄袖中層下」、「山田羨中層」、「山ノ田散乱」、「③」の 7 種類である。玄室奥壁付近で出土したものが 2 点、玄室内で出土したものが 2 点、玄室内袖石付近で出土したものが 24 点、羨道で出土したものが 3 点となる。ほとんどの山茶碗が玄室内の袖石付近から出土しており、羨道や袖石より奥の玄室内からの出土は少ない。出土状態は、「袖石間に置かれたものはいずれも表面で同一平面にあたかも何かを盛って供されたものの如く並べられ、両袖石、玄室側の隅には不用品を片付けるが如く積み重ねて置かれていた (安藤・松原ほか 2007)」ようだ。出土位置ごとに山茶碗の時期が大きく異なったり極端に偏りがあることはなく、主に 5 型式から 7 型式といった短期に集中することから、先の調査⁶⁾で推測された通り、同時期に石室を何らかの目的で使用したものと考えられる。

おわりに

今回の報告にあたり、人類学博物館の職員の方々にご協力いただいた。末筆であるが、記して感謝する次第である。

注

- 1) 山の田古墳の名称は、昭和 27 年 10 月 15 日に、伊奈・川端が、調査に先立ち古墳を観察した際、現地の小字名から「山ノ田古墳」と命名した。しかし、『守山の古墳』(久永春男・田中稔編 1963)では「山の田古墳」と呼称され、現在の遺跡名も「山の田古墳」となっている。本稿では、現在の遺跡名である「山の田古墳」の名称を使用する。
- 2) 川端が残した記録は、『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』に全文が紹介されている。(安藤義弘・松原隆治ほか 2007「中山英司と愛知の遺跡」『伊藤秋男先生古希記念考古学論文集』同刊行会。) 原本は、南山大学人類学民族学研究所の便箋 11 枚であるらしい。
- 3) 藤澤良祐 1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第 3 号、三重県埋蔵文化財センター。同 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院。
瀬戸市教育委員会 1990『尾呂』。
- 4) 注 2 に同じ。
- 5) 注 2 に同じ。
- 6) 昭和 27 年調査 (南山大学人類学民族学研究所)、平成 21 年調査 (名古屋市教育委員会)。

参考文献

安藤義弘・松原隆治ほか 2007「中山英司と愛知の遺跡」『伊藤秋男先生古希記念考古学

論文集』同刊行会。
稲垣晋也 1957「愛知県東春日井郡山ノ田古墳」『日本考古学年報5昭和27年度』日本考古学協会。

名古屋市見晴台考古資料館 2010『山の田古墳発掘調査報告書』名古屋市教育委員会。

(南山大学人類学博物館臨時職員)



図1 山の田古墳と周辺の古墳 (名古屋市見晴台考古資料館 2010より引用)

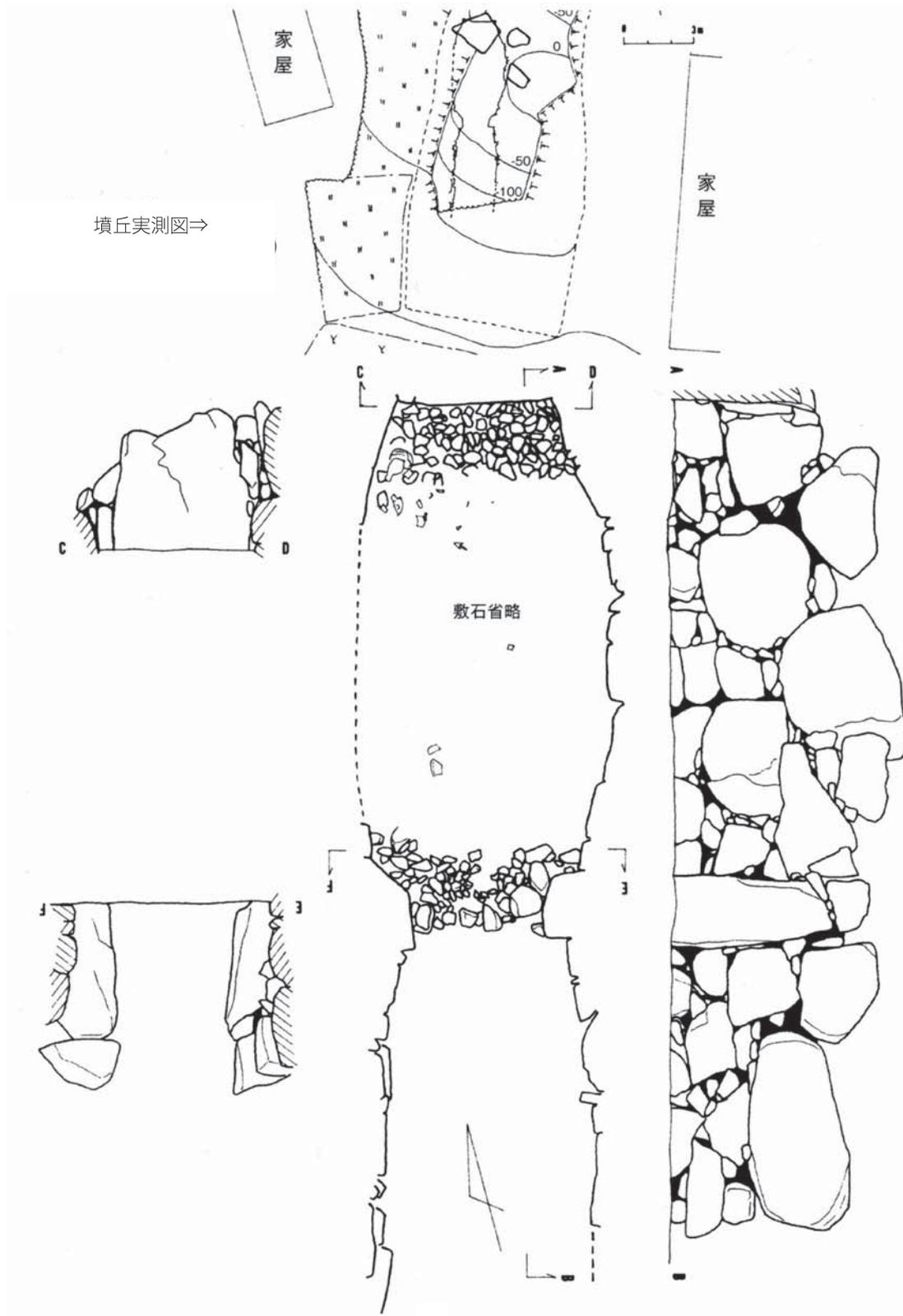


図2 山の田古墳 石室実測図 (S=1/60)、墳丘実測図 (S=1/300)
 (安藤・松原ほか 2007 より引用)



写真1 山の田古墳墳丘（昭和27年調査前）



写真2 山の田古墳石室（昭和27年調査後）



写真3 石室玄室（羨道より）



写真4 石室玄室（奥壁より）



写真5 石室内全景（羨道より）



写真6 玄室内山茶碗出土状況（袖石付近）



写真7 玄室内遺物出土状況（奥壁付近）

遺物観察表 ※（ ）は復元径。

No.	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存率(%)	類型	型式	注記	備考
1	碗	(17.6)	(7.7)	6	40	尾張	4~5型式	山ノ田 No. 2	
2	碗	15.9	8	5	80	尾張	6~7型式	山ノ田 No. 3	
3	碗	14	5.6	5.2	100	尾張	6~7型式	山ノ田 No. 4	
4	碗	14.4	5.8	5.8	100	尾張	7型式	山ノ田 No. 5	
5	碗	14	6.5	4.8	95	尾張	6~7型式	山ノ田 No. 6	
6	碗	14	5.3	5.4	98	尾張	7型式	山ノ田 No. 7	
7	碗	14.4	6	5.5	95	尾張	6~7型式	山ノ田 No. 9	口縁が歪んでいる。
8	碗	15.8	7.5	4.7	100	尾張	6型式	山ノ田 No. 10	
9	碗	13.4	6.3	4.5	95	尾張	7型式	山ノ田 No. 11	
10	碗	14.5	5.8	5.3	80	尾張	6型式	山ノ田玄奥2	
11	碗	14	5.2	4.7	60	東濃	7型式	山田玄奥	
12	碗	15.3	7	4.6	100	尾張	5型式	山ノ田玄中層下1	口縁が歪んでいる。
13	碗	16.5	7.7	5.2	70	尾張	5型式	山ノ田玄中層下2	
14	碗	15.2	6.5	5.2	98	尾張	6型式	山ノ田玄袖中層下a	
15	碗	15.2	7	4.7	100	尾張	5型式	山ノ田玄袖中層下b	
16	碗	(14)	5	5.2	50	東濃	5~6型式	山田玄袖中層下c	底部内面中央に「◎」痕。
17	碗	16	7	5	90	尾張	5型式	山田玄袖中層下d	重ね焼き痕あり。体部内面に自然釉がかかる。
18	碗	14.5	6	5.5	95	尾張	7型式	山ノ田玄袖中層下e	口縁が歪んでいる。
19	碗	14.4	5.6	5.6	45	尾張	7型式	山田玄袖中層下f	口縁が歪んでいる。
20	碗	16	7.2	5.4	65	尾張	5~6型式	山田玄袖中層下■	注記「i」か。
21	碗	14.7	5.8	5	100	尾張	4~5型式	山ノ田玄袖中層下h	
22	小皿	8	3.5	2.4	100	尾張	5型式	山田玄袖中層下k	
23	小皿	9	4.6	2.2	100	尾張	5型式	山田玄袖中層下l	
24	碗	14	5.6	5.4	99	尾張	6型式	玄袖中層下m	
25	碗	16	6.8	4.9	100	尾張	4~5型式	玄袖中層下n	口縁が歪んでいる。
26	碗	16.4	7.2	5.7	90	尾張	5型式	山田玄袖中層下o	重ね焼き痕あり。
27	碗		(4.8)		25	東濃	7型式	山ノ田玄袖中層下	
28	碗		(7.6)		30	尾張	4~5型式	山ノ田玄袖中層下	
29	碗	14	7	5	85	尾張	8型式	山田羨中層a	口縁が大きく歪んでいる。
30	碗	15.4	6.7	5.2	100	尾張	5型式	山田羨中層b	体部内面に自然釉がかかる。
31	碗	13.8	6.7	5	98	尾張	7型式	山田羨中層c	
32	碗	(14)	5.2	5	65	東濃	7型式	山ノ田散乱	重ね焼き痕あり。
33	碗	14	(6)	5	40	尾張	7型式	山ノ田散乱	
34	小皿	10	5.6	3.4	90	尾張	4型式	③	粘土紐積み上げ痕あり。

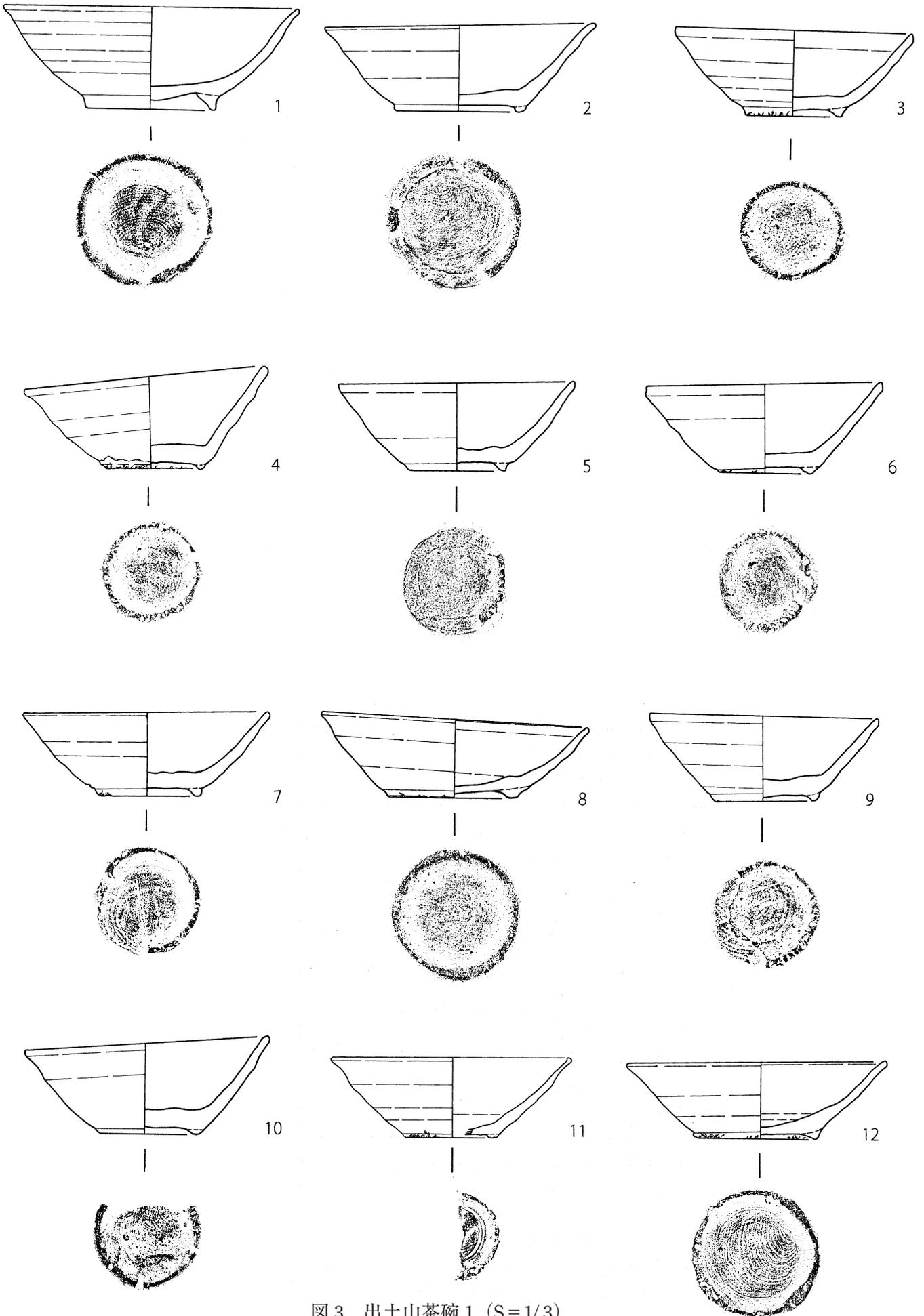


图3 出土山茶碗1 (S=1/3)

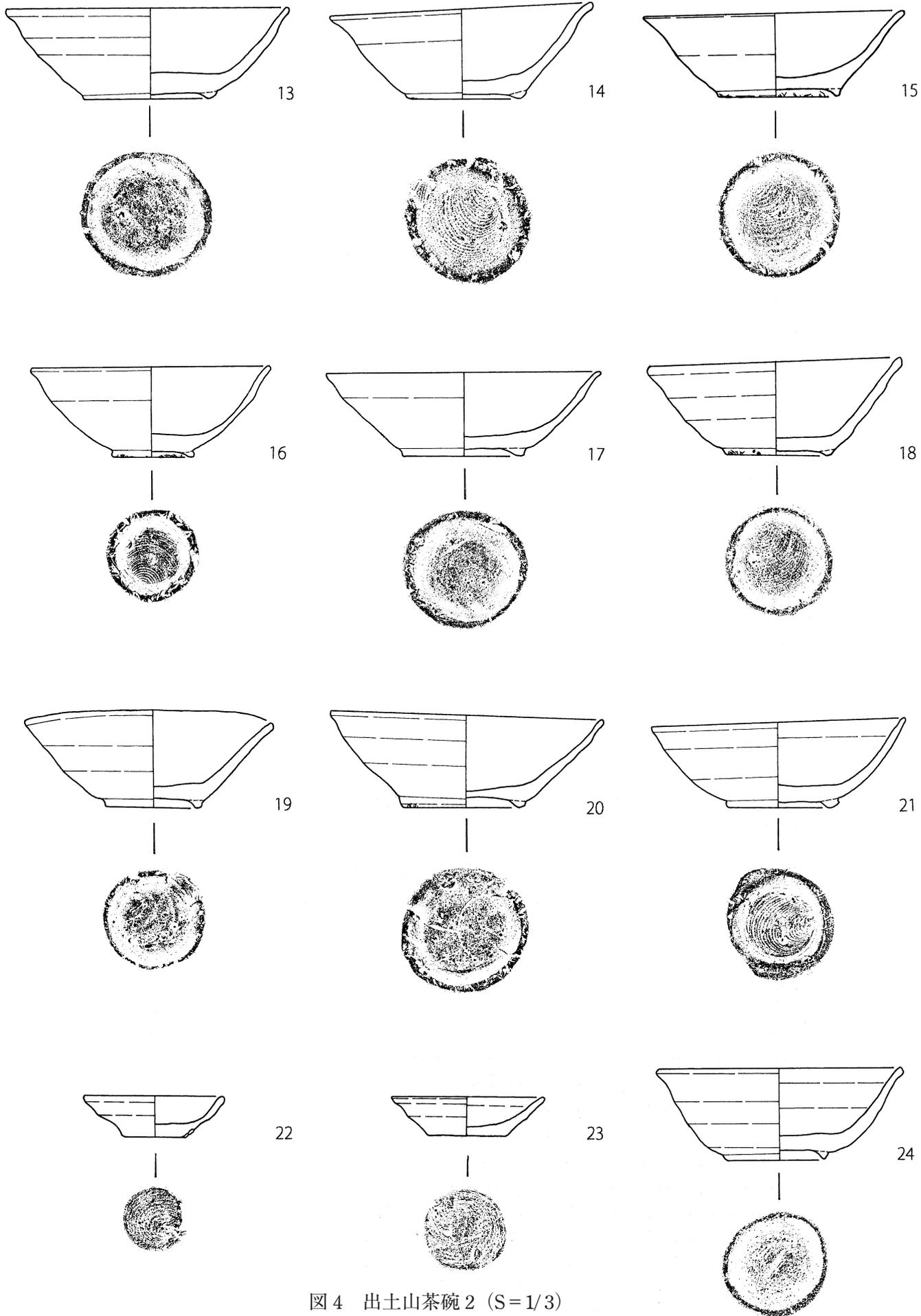


图4 出土山茶碗2 (S=1/3)

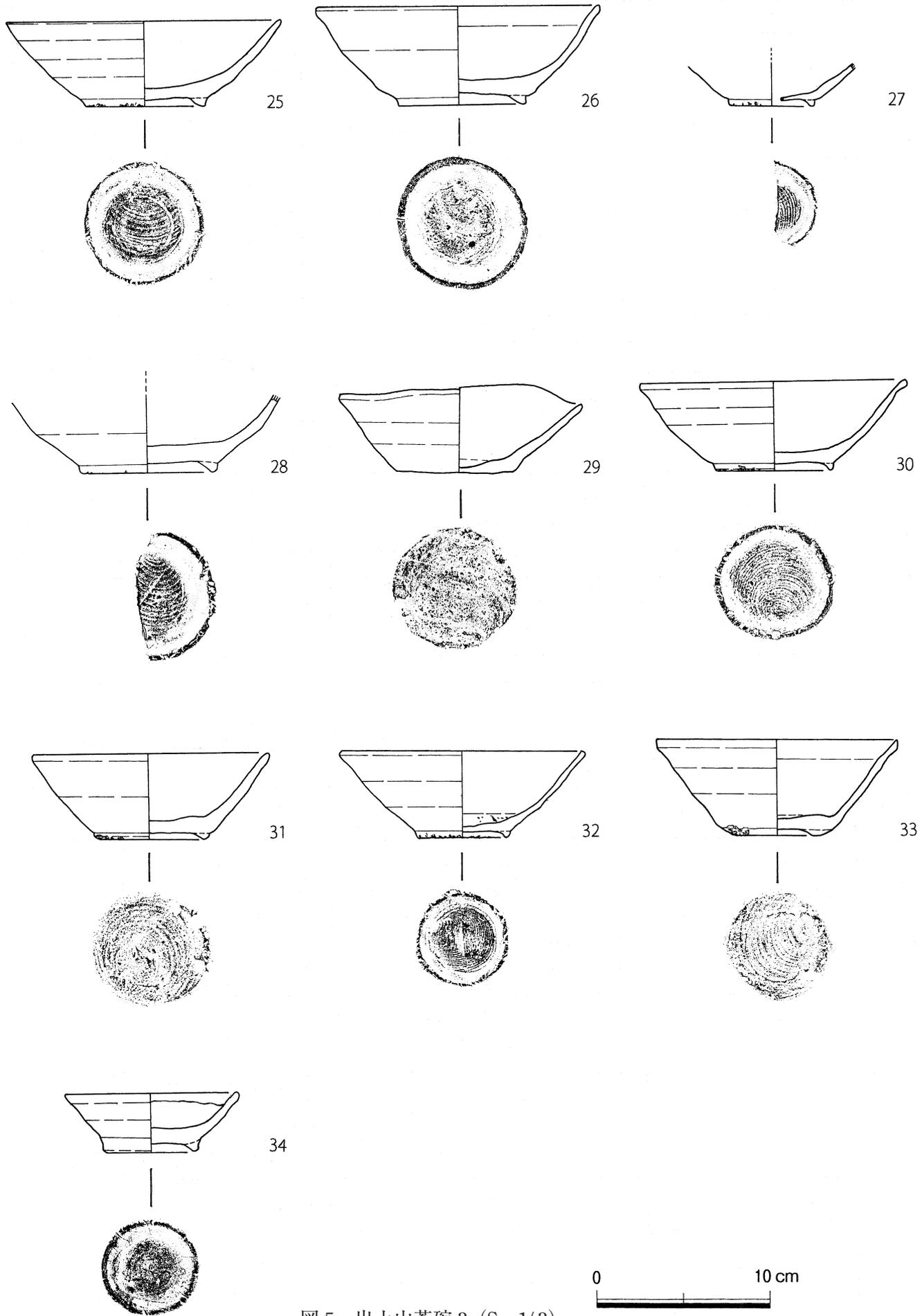


图5 出土山茶碗3 (S=1/3)

Re-report of *Yamajawan* from Yamanota Ancient Mound

SHIMADA Naoko

Yamanota Ancient Mound, placed in Moriyama ward, Nagoya City, is an ancient tomb with a horizontal stone chamber. It is one of clustered tumuli mounds at the foot of ToGoku Hills, located on the terrace of the Shonai River. Excavations were carried out first by Nanzan Institute for Anthropology and Ethnology in 1952, then by the Board of Education of Nagoya City in 2009. The mound itself is now lost, but the archaeological finds are reserved in the Anthropological Museum of Nanzan University and in Miharashidai Archaeological Museum of Nagoya City. This paper re-reports on *yamajawan* (domestic ware) excavated by the research group of Nanzan University in 1952.

31 bowls and 3 small plates are recorded at the excavation, and classified as the types 4 to 8 of Owari Type and Tono Type according to the Typological Chronology by Ryosuke Fujisawa, suggesting that these finds belong to a short period of time. Most of them were found around *sodeishi* (side-stones of steps) of the burial chamber, and there were few finds from the passage and inner part of the burial chamber. This may suggest that the burial chamber was used for some purpose in the same period.

新しい人類学博物館への提言

黒沢 浩・西川由佳里

はじめに

南山大学人類学博物館は、1949年に南山大学人類学民族学研究所の付属陳列室として誕生した。以来、大学博物館としてだけでなく、日本の博物館の中で唯一、「人類学」を冠した博物館として知られてきた。だが、日本の多くの大学博物館がそうであったように、大学内部での知名度は低く、長く「お荷物」的な扱いを受けてきたといえる。

だが、今日、そうした流れは大きく変わり、大学にとって付属博物館を有していることの意義が見直されつつある。そうした変化の要因として、1995年に文部省(当時)学術審議会が出した「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」という中間報告や、1996年に文部省生涯学習審議会が出した「地域における生涯学習機会の充実方策について」という答申があったことは言うまでもない。しかし、それ以上に、18歳人口の減少による受験者数・学生数の減少を見越した大学が、学生以外の「顧客」として社会人に目をつけ、それを積極的に取り込むために「生涯学習」を持ち出したことも、現実的な要因としては無視できない。

今日では、そうした草創期を経て、大学における生涯学習の必要性と学術標本の活用という視点から、大学博物館の役割が見直されるという、次の段階に入ってきてい

ると思われる。

南山大学においても、人類学博物館の整備をすすめる方針は、すでに2004年の段階で固まっていたようである。2004年には博物館のあり方に係るプロジェクトチームが立ち上がり、その年の10月に「南山大学人類学博物館の将来計画と必要措置」という答申を大学副学長に提出している。その後、博物館規程が制定されるなど、組織としての体裁が整い始めていく。

だが、施設面においては、収蔵庫の増設などの改善や、いくつかの移転候補地は挙げられたものの、大きな変更がなされることはなかった。

そうした中、2009年に現在のR棟の建設が決まると、それに合わせて博物館のR棟地下への移転が決定された。こうして、人類学博物館のR棟への移転と、「新・人類学博物館」の建設計画が本格化したのである。

ところで、人類学博物館では、建設計画の決定に先立ち、文部科学省の補助事業であるオープンリサーチセンター事業の中で、新しい博物館の方向性を研究・模索していた。そこでの研究では、従来の博物館の存立基盤についても批判的な検討が加えられ、また、考古学・人類学の資料研究が深まるにつれ、新たな博物館のイメージがおぼろげながら見えてきたと言える。

そして、それらの研究や、現時点でのわ

れわれの認識に基づき、新しい人類学博物館を創るための一つのステップとして、「利用者の声に耳を傾ける」ことがきわめて重要な方法であると判断した。

本レポートは、そうした試みに関する成果報告である。(黒沢)

1. 目的・対象

(1) 目的

従来、新しく博物館を作るときには、博物館の「専門家」である学識経験者や有識者、そして建設される博物館が公立の場合にはその自治体の中からはかるべき職員が選ばれ、場合によっては市民代表の立場の人が加わって基本計画を策定してきた。策定された基本計画は原則として公開されることになるが（公開されない場合もある）、策定のプロセスに関しては公開されることはない。もちろん、情報公開の原則から議事録等の開示は行われるにしても、それはあくまでも事後のことであり、そのプロセスに一般の人が参加する機会是与えられていないのが普通である。

だが、こうした既存の方法は、「博物館は誰のものか」という問いを前にしたとき、博物館の利用主体が除外されているという批判を避けることはできないであろう。

日本においてはこうした問いかけ自体が出にくい土壌がある。それは、利用者側の意識として、博物館は「お上が作り、われわれは見せていただく立場」という認識があること、そして、博物館を設置する側もそれに甘んじているところがあることに根差している。

筆者の一人、黒沢は、そうした状況が日本の近代博物館の成立時点までさかのぼっ

て根差していることを指摘してきたし、それを「博物館文化の欠如」という表現で批判してきた。要は、博物館とその利用者、もたれ合った関係が日本の博物館をめぐる知的風土を停滞させる大きな原因であるということである。

欧米では、博物館・美術館の成り立ちからいっても、それは市民自身のものであるという意識が強い。そのことが、博物館側をして「博物館は誰のものか？」という問いに正面から向き合うことを余儀なくされているのであり、博物館や美術館とは、市民の信託のもとにある存在という認識が共有されているといえる（J. クノー編 2008）。

しかし、日本においても博物館建設にあたり、市民の声を聞き、それを反映させていこうという動きが現れ始めていることも確かである。

三重県では、新しい県立博物館を建設しようとしているが、その過程でシンポジウムや県民意見交換会などを実施し、市民参加による博物館づくりを進めていることは、博物館の「作り方」に一石を投じる手法であると思う。

考えてみれば、伊藤寿朗が提唱した第3世代の博物館（伊藤 1993）が、伊藤の提唱から25年たち、ようやく姿を現そうとしているということになるだろうか。

これらのことを総合的に考えるならば、われわれが博物館をつくるにあたってまず問わなければならないのは、「その博物館は誰のものなのか」ということであり、博物館の利用主体がどのような博物館を望んでいるのかを真摯に受け止めることである。

このことは、実際に利用者に博物館建設

を委ねるという意味ではない。博物館建設は、現実的に巨額の費用が必要なものであり、その責任が設置主体にあることは言うまでもない。ただ、そこで構想される博物館が、従来のように一部で基本方針を決めるのではなく、その決定プロセスに利用者が様々な形で関わるのが重要なのである。

今回、人類学博物館をリニューアルするにあたって、人類学博物館を利用することが想定される様々な立場の人たちに意見を聞き、それを基本構想に反映させることにしたのは、以上のような理由からである。

(2) 対象

一口に博物館の利用者といっても、その範囲はあまりにも広い。公立博物館であれば、第一義的にはその自治体の住民ということになるだろうが、私立博物館の場合には、その範囲はさらに広がる。そのように考えてしまうと、ほとんど対象の措定は不可能になってしまうであろう。人類学博物館のような大学博物館の場合には、公立博物館・私立博物館に比べ、その対象を見据えやすいという利点はあるが、それでも予想されるすべての利用者を視野に入れることは容易ではない。

そこで、やや視点を変えて、これから博物館が活動していく中でおこなう様々な事業において向かい合う相手は誰か、という観点から考えてみたい。

人類学博物館の場合には、大学博物館という役割から鑑みても、まずは南山大学の学生や大学院生であることは言うまでもない。

次に、博物館の教育機能の強化ということを見ると、学校教育との連携を外すわ

けにはいかない。一宮市博物館や美濃加茂市民ミュージアムの事例を挙げるまでもなく、今日、博物館の活動のなかで博学連携は大きな割合を占めるようになってきており、人類学博物館においても、2006年より名城大学附属高校（以下、名城高校）との連携授業を開始している。そして今後、後述する南山単位校も含め、小・中・高校との緊密かつ多様な連携を図っていくことは、大学博物館においてもきわめて重要なことであると考えている。

それは、現実的な話として、大学の魅力をアピールすることで受験者および入学者の確保という役割の一翼を担うということもある。しかし、当然のことながら、そうした「功利的」なことだけが目的ではない。最も重要なことは、大学就学以前の生徒・児童に、学校で習うこととはやや違う学びを経験してもらいたいということに尽きるはずである。

そうしたことが果たしてどのようにしたら可能なのか？この課題に道筋をつけるため、実際に学校教育の現場にいる先生方に直接ご意見をいただくことにした。

そして3番目として、今回初めて視覚障害者の方々から博物館利用に関するご意見をいただくことにした。ここにいたる経緯については若干説明する必要があるだろう。

発端は、2011年3月13日に美濃加茂市民ミュージアムで開催された「公開講演会ユニバーサル・ミュージアムを掘る―誰もが楽しめる博物館の創造をめざして―」に、市民ミュージアム学芸員の藤村俊氏のお誘いによって、黒沢と人類学博物館特別嘱託の竹尾美里・西川由佳里の3名で参加した

ことにある。端的に言えば、この講演会のメイン・スピーカーであった国立民族学博物館の広瀬浩二郎氏の講演を聴いたことで、われわれは新しい博物館の可能性に気づかされたのである。

その後、黒沢が広瀬氏に連絡を取り、南山大学で講演をしてほしいこと、そして新しい人類学博物館を広瀬氏の提唱する「ユニバーサル・ミュージアム」として実現したい旨を伝えた。

実は講演会自体は人類学博物館の主催ではなく、大学の学芸員養成課程の主催で行われたが、当日は多くの博物館関係者の来場もあり、また、学芸員養成課程を受講している学生や大学院生も参加し、博物館に関する講演会としては、思いのほか多くの人たちの参加があった。

さらに、広瀬氏に新しい人類学博物館への助言を求めた際に、名古屋にある社会福祉法人名古屋ライトハウスの小川真美子さんと松崎直美さんをご紹介いただき、今後は名古屋ライトハウスと連携しながら進めてはどうかとのアドバイスをいただいたのである。これが機縁となって、当日は名古屋ライトハウスの方々にも参加していただき、視覚障害者からの声を直接聞かせていただく機会を得たことは大変大きな収穫であった。

以上のような経緯のもとに、今回の意見聴取については、南山大学の学生・大学院生、名古屋・瀬戸地区を中心とした愛知県内の学校教員の方々、南山単位校の先生方、そして広瀬浩二郎氏と名古屋ライトハウスの方々を対象として行うことができたのである。

もちろん、それ以外にも南山大学卒業生

(特に人類学・考古学の出身者)、大学関係者、地域住民など、様々な対象があり得る。また、留学生などの外国人についても同様であり、特に人類学博物館所蔵の民族誌資料の採集地——パプアニューギニアやタイ北部——の人たちに意見を聞く場を設けていないことは、人類学を標榜する博物館としては「実践を伴わない」との謗りを免れないであろう。そうした方々からの意見聴取の機会も今後設けていきたいが、日程や広報の調整が難しく果たせないでいる。その責を感じながら、今後の課題としたい。

(黒沢)

2. 意見聴取の概要

(1) 学生・大学院生に対する意見聴取

2011年5月12日に、人類学博物館懇談会(通称“博物館カフェ”)を開き、本館の一番身近な利用者である本学学生を対象とした意見聴取を行った。参加者は、本学学生21名、本学教員1名、一般参加者1名であった。なお、本聴取会の司会進行は黒沢が務め、特別コメンテーターを株式会社丹青社の安齋聡子氏が務めた。

①学生・大学院生からの意見

A：人類学博物館の良い点について

- ・来館者の良心・判断に委ねられている。
- ・こぢんまりとしてアットホームな雰囲気である。
- ・展示資料の種類、数が多く、迫力がある。
- ・東ニューギニア調査団など、南山大学の調査によって得られた資料が展示されているので、過去の成果を知ることができる。また、これを活用した博物館学を学ぶことができる。

- ・固定された動線がないこと、また解説が必要最低限であることにより、来館者の自由意思で鑑賞できる。来館者が主体となれる。
 - ・探検しがいがある。
 - ・気分転換になる。
 - ・歴史を感じさせる展示ケースなど、古い什器の雰囲気が良い。
 - ・古いものがあると、つながりを感じられる。
 - ・生活資料の展示が音声や映像を使用しており、面白い。
- B：人類学博物館の改善点について
- ・収蔵庫の環境が劣悪である。カビが収蔵庫に発生している。
 - ・収蔵庫が点在しているため、使用するのに不便ではないか。
 - ・入館しにくい雰囲気である。
 - ・動線がわかりにくい。
 - ・展示資料に対して展示スペースが狭い。資料が多すぎる。
 - ・博物館の位置や当日の開・閉館情報を告知する情報提供（看板等）が少ない。
 - ・静かすぎる。
 - ・一体何が目玉資料なのか、価値がある資料なのかわからない。
 - ・資料に直接テグスが巻きつけてあり、痕がついてしまっている。
 - ・展示の見方がわからない。
 - ・床がきしむ。
 - ・害虫が多い。
 - ・セキュリティが甘い。
 - ・展示室の照明が暗く、また展示ケースに反射して資料が見難い。
 - ・せっかく実験展示があるのに、来館者に向けての十分なPRが行われていない。
 - ・ウォールケースがガタつくなど、展示ケースに不備がある。
- C：リニューアル後の人類学博物館について
- ・南山大学らしいカラーを打ち出したい。
 - ・南山大生の自慢となるような博物館にしてほしい。
 - ・来館の度に発見のある博物館にしてほしい。
 - ・I Pod や I Pad で資料情報や、展示解説を見られるといい。
 - ・メモを取る場所がほしい。
 - ・ハンズオン展示をしてほしい。
 - ・特別展をして、毎回違う資料が見られると良い。
 - ・一つの資料を多面的に解説する展示をしてほしい。
 - ・聴覚に訴える展示をしてほしい。
 - ・視聴覚資料を使用する場所を設けてほしい。
 - ・他学部の人でも気安く来館できるようにしてほしい。
 - ・親しみやすさと落ち着きを兼ね備えてほしい。
 - ・学生の活動を学外の人に公開する場を設けてほしい。
 - ・専攻学生の成果を他学部の学生にも見てもらえるようにしたい。他学部の知見も併せてゆけると良い。
 - ・学生はもちろん、様々な分野の教員利用が増えると良い。
 - ・学習の成果を発表するスペースを設けてほしい。
 - ・学内サークルの活動と連携した展示をしてはどうか。
 - ・回想法の実践などを通して、地域交流を図ってほしい。



2011年5月12日 人類学博物館懇談会（通称“博物館カフェ”）
 ※中央が安斎聡子氏。その前方の机上には、丹青社が製作した「新博物館
 展示室模型」が置かれている。

- ・ミュージアムショップがあると良い。特別展にちなんだグッズを開発してはどうか。
- ・図書館資料の貸出し期間を延長してほしい。また、読書スペースを設けてほしい。
- ・広報に力を入れるべきだ。
- ・HPの存在をもっとPRすべきだ。

②意見の概要

現在の人類学博物館の評価できる点としては、歴史を感じさせる展示室や暖かみの感じられる雰囲気を挙げる学生が多かった。

また、調査研究を主眼においた展示構成のため当館では資料に対する解説が少ないが、これに対しても、来館者主体の学習機会を与えているという評価が聞かれた。しかし、その一方で専門的に学習をしていない、ふらりと博物館を訪れた来館者にとって、この措置が不親切と映ることもありうるとの意見もあった。新博物館では、展示

パネルやキャプションを一新する予定であり、展示解説についての今回の提言は十分に議論しなくてはならない課題である。

改善点として挙げられた、「何がこの博物館の目玉なのかがわからない」という意見も展示解説の不足・不備と捉えることができる。また同時に、学内に向けての広報活動の不十分さもこの意見の背景にはあるものと思われる。実際当館の利用者は、履修科目や視覚科目の関係もあり、人文学部—さらには人類文化学科と限定できるかもしれない—の学生の利用が圧倒的に多い。4年間をキャンパスで過ごしたにも関わらず、人類学博物館の存在自体を知らなかったと述懐する学生も少なくない。学生、教員、職員など、学内の利用者を増やすためにも、リニューアルを機により効果的な宣伝方法を考えねばならない。

リニューアル後の人類学博物館に対する要望としては、展示手法からミュージアムショップまで、多岐に亘る意見が聞かれた。

とりわけ、学生や院生の調査・研究結果を学内、外に発表する場としたい、という意見が多く聞かれた。

本意見聴取会後には、参加者に向けてアンケートを実施した。参加者23名中19名から回答があった。本会の満足度を5段階評価してもらったところ、平均値は4.6点であった。具体的には、「博物館好きな人たちで話し合うことができ、楽しかった」、「活発な意見交流ができた」、「自由に意見が言えた」など、今回の企画に対する前向きな評価が得られ、またこのような企画の継続化を望む意見も多く聞かれた。意見聴取会としても、また、学生を対象とした気軽な懇談会としても、今回の催しは初の試

みであったが、今後も同様の機会を継続してゆくことを次年度以降の活動計画への抱負としたい。(西川)

(2) 学校教員に対する意見聴取

① 学校教員からの意見

学校教員からの意見聴取については、2011年5月20日に名瀬地区高等学校社会科教育研究会(以下高社研)の協力のもと、高社研の研修会を人類学博物館で行ってもらい、その機会に意見をうかがったものである。

意見聴取は、黒沢が新しい人類学博物館の構想を説明し、それに基づいてフリートークで考えるところ、思うところを

博学連携に関する質問

南山大学人文学部人類文化学科
准教授 黒沢浩

南山大学では、2013年10月に人類学博物館をリニューアルいたします。新しい人類学博物館では、博物館と学校との学習連携(博学連携)に力を入れていきますが、それに関して、皆様のご意見をおうかがいいたします。どうぞ、お気軽にお書き下さい!

1 博学連携に関心をおもちですか?

はい いいえ どちらともいえない

2 生徒さんに博物館に行くことを勧められることはありますか?

はい いいえ

3 2で「いいえ」と答えられた方は、博物館のどのような点が生徒さんに勧められない点だと思いますか。

4 学校が博物館と協力するにあたり、博物館が準備しておくべきことは何だと思えますか?

5 博物館は生徒さんたちにどのような学習機会を提供すべきだと思いますか?

学校教員に対する質問票

述べてもらった。そして最後に配布した「博学連携に関する質問」に記入してもらい、集計することにした。本レポートにおける意見の集約は、基本的にこの質問に対する回答をベースとしている。

質問は5つで、最初の1・2が「はい/いいえ」形式で回答を求めるもので、あとの3~4は記述式で回答してもらおう形になっている。また、3の問いは2で「いいえ」と答えられた方にその理由を聞くものであり、高社研の場合には1名のみであった。

以下、アンケートの4と5について、その内容を示す。

A：学校が博物館と協力するにあたり、博物館が準備しておくべきことは何だと思えますか？

- ・小中高の教育現場はとにかく忙しいので、マルナゲしたくなるが、事前連絡・事後のことまで考えての情報交換はなにより重要だと思う。
 - ・学芸員がいろいろな質問に答えられるように待機する。
 - ・生徒の現状（興味関心）を理解して、実態を知ってほしい。
 - ・第一に広報。教員向けに大学説明会でも積極的にPRして、できれば学生による案内をしてもらうといいと思う。オープンキャンパスにおける、PRと熱意ある案内を要望する。
- また、案内には博物館実習の学生に実習の一コマとして高校生にわかりやすい語りをさせてもいいのではないか。
- ・展示の在り方として、教科書との関連があってこそ立体的な学習ができるのではないか。
 - ・子供用のパンフレットなどで、展示品に

ついてわかりやすく解説（情報提供）してほしい。

- ・中・高校生レベルでも対応できるような年表、個別の展示品の解説がほしい。
- ・とても難しく不可能に近いとは思いますが、対応できる幅を広くとってもらいたい。「見なさい」という上からの目線ではなく、どうしたらよいかを学校側としっかり連携を取ってもらいたい。
- ・本物の展示も大切だが、レプリカも含めて学校で習ったものを、見たり触ったり体験できると良い。
- ・親しみやすい説明プログラムがあると良い。
- ・小中高など発達段階に応じた資料作り、平易な解説やワークシートがあると良い。
- ・年齢層別のワークシートがあると良い。展示スペースはもう少し広いと良い。小中向けなら「ゆるキャラ」のようなキャラクターを作り、PRしても良いかもしれない。
- ・土器づくりなどの実践体験をしたい。
- ・生徒の好奇心をくすぐるような、仕掛けやプログラムがほしい。
- ・壊れては困るものであるなら複製品を作って、手に取って学ばせる機会をつくる。モノは壊れるという前提で、モノを手に取れるようにしてほしい。
- ・体験や実習の準備が必要だ。バケツに土や砂を入れておき、中に土器などのレプリカを入れて、見つけさせる。「学生学芸員」のアイディアは面白いかもしれない。
- ・子供が自ら考える、自ら発見することができるような可能性を残しておくべき。

解説でガチガチではつまらない。

- ・立ち止まって説明を聞くスペース。実物を前にして、その場で聞かせたい。
- ・展示内容の解説、ガイドが必要だ。学生が活躍するチャンスではないか。
- ・小中高へのPR。
- ・考古学、人類学、民族学への関心を引き出す取り組み。
- ・大学にある博物館ならではのものを作っていく。

- ・収藏品リストがあると良い。民博のように、学校に貸し出しできるとうれしい。

B：博物館は生徒さんたちにどのような学習機会を提供すべきだと思いますか？

- ・本物を見ることは大切だが、加えて出土した状態がわかる資料もあると、より分かりやすい。
- ・土器など、出土品の使い方がわかると生徒もより興味を持つと思う。
- ・むしろ教科書に書いていないようなことを説明する。
- ・教科書、図説などとの関連を持った展示がほしい。
- ・総合的学習の時間を実質的にやっている学校なら連携できる。
- ・見学が基本だとは思いますが、その準備段階として「出前講義」のようなものをまず行なえないだろうか。われわれ教員もサポートするが、博物館の方からのお話が聞きたい。また、総合学習を利用して、1年生として、2年生として、3年生としてというように3年間かけて生徒が発表できる基礎をつくるというサポートをしてほしい。ともかく敷居が低く、気軽に入れる雰囲気づくりを希望する。パブリックミュージアムとは違う気軽さが

あってもよいと思う。

- ・体験できる機会があること。
- ・南山大学にあることを活かして、考古学専攻・人類学専攻の「高校生向け」オープンキャンパスを開催する。
- ・遺跡発掘の現地体験を企画する。
- ・視覚的には副教材の資料集などで慣れているので、展示物にふれたり、体験したりすることが博物館に求められていると思う。
- ・土器作りをしたり、貫頭衣などの服を着用し、写真撮影をしたりするような、体験学習を行ってほしい。
- ・ビジュアルにもう少し訴える。クラフトで立体模型を作ってはどうか。全体的なジオラマ展示も良い。
- ・習俗の紹介をしてほしい。固定化するもの、変化するものの体験をさせたい。ロクロの使用も一つの手だが、縄文土器を作るというところに想像力をみる（小学生なら特に）ことができると思う。パズルのように土器片を組み合わせ、モノによっては石膏で補いつつ、土器を完成させる。
- ・学芸員のインターンシップをさせたい。体験させると文字の持つ力と実際のギャップを感じることができる。
- ・体験学習が肝要だ。見るだけならネット、教科書でも十分。たとえば4~5年程前、「鉄腕ダッシュ」という番組で恐竜の化石を発掘していた。子供たちに興味を持たせるためには、「土」に触れさせる。「脳を科学する」という本にもあるが、「小さな目標」を達成させることで、「大きな目標」を見つけさせる。この「小さな目標」が「体験学習」ではないか。

- ・固めた土板をハケでこすると土器が出てくる、「発掘体験キット」の開発をしてみようか。
- ・研究が確立していない内容を、その段階まで発表しておき、不明確な内容を示す。その不明確さを自由に想像させるなど。
- ・「あれは特別な授業」ということで、子供の頭の中で特別な場所に仕舞っておくのではなく、日常の授業とリンクした授業（学習機会）を体験させたい。
- ・人類学、考古学とは何かがわかるようなワークショップ。高校でも進学希望が今まで以上に減っている。こんな学問なんだ、と学生が理解できる内容を提供してほしい。

②アンケート結果の概要

1の「博学連携に関心をおもちですか」という問いについては「はい」が13、「いいえ」0、「どちらともいえない」が4であった。大多数が「はい」と答えているが、「どちらともいえない」が4名いたのはやや気になるところである。その理由は必ずしも明確ではないが、「生徒の現状を理解して、実態を知ってほしい」というコメントが4の問いに対してなされていることから推測すると、博物館側が学校や生徒・児童の状況に対してあまり関心を払っていないことに対する不満と受け取ることもできる。

2の「生徒さんに博物館に行くことを勧められることはありますか？」との問いには、16名の方が「はい」と答えられている。そして、先述のように、お1人だけ、「いいえ」と回答された方がおり、その理由は「見るだけでは興味をもつことはできない」というものであった。

4の「学校が博物館と協力するにあたり、博物館が準備しておくべきことは何だと思いますか？」との問いに対しては、様々な意見が寄せられた。それらをいくつかのカテゴリーに分類すると次のようになる。

《広報・情報交換の充実》

学校に対するPRの充実を求めるものである。具体的には、教員向けの大学説明会やオープンキャンパスでのPR、また子供向けのパンフレットを用意するなどの意見が出されている。また、学校と博物館の緊密な連絡が必要という指摘もなされている。

《教育プログラムの向上》

学芸員が質問に答えてくれる、中・高校生レベルでもわかる年表や個別の展示品に対する解説、教科書と関連させた立体的な学習、ワークシートの用意、児童・生徒の発達段階に応じた資料作り、生徒の好奇心をくすぐるようなプログラム、考古学・人類学・民族学への関心を引き出すような仕掛け、といった案が出されている。また、国立民族学博物館が行っているような資料貸し出しキット(みんぱっく)の提案もあった。

《体験学習》

一口に「体験学習」といってもその具体的なイメージには幅があり、実物もしくはレプリカに触れられるようにしてほしいというハンズオンのものから、土器づくりの実践体験、発掘の疑似体験など、やや手の込んだ、複雑なものまで含まれている。

大まかに言えば、以上の3つにカテゴリー化することができよう。このほかに、博物館実習の学生に高校生向けの語り(説明)をしてもらう、子供が自ら考え、自ら発見

できる可能性を残すべき、大学博物館ならではのものをつくっていくなどの意見が出された。

その中で、「見なさい」という上からの目線ではなく、どうしたらよいかを学校側としっかり連携を取ってもらいたい」との意見は大切だと考える。

5の「博物館は生徒さんたちにどのような学習機会を提供すべきだと思いますか？」という問いについては、一部4と重複する回答はあるものの、ここでもまた様々な意見が出された。

もっとも目立ったのは、体験学習の機会を要望するものである。たとえば、遺跡発掘の現地体験、あるいは発掘体験キットの開発、土器づくりや貫頭衣等の着用などである。これらとはやや異なる視点のものとして、学芸員のインターンシップというものもある。中にはかなり具体的に、ジオラマ展示や土器片を組み合わせて土器を完成させるなどの提案もあった。

一方で、授業や教科書との関連を求める意見や出前講義の要望もあり、さらに総合的な学習の時間を利用して3年間かけて生徒が発表できる基礎をつくることのサポートを、というものもある。

教科書との関連でいえば、逆に教科書に書いていないようなことを説明するという提案もある。

また、展示の仕方としていいと思うが、考古資料の出土状態がわかる資料がほしい、出土品の使い方がわかると生徒が興味をもつ、というアイデアも提案されている。

以上のような具体的な要望のほかに、博物館に求めることとして、研究が確立して

いない内容を、その段階まで発表しておき、不明確な内容を示す。その不明確さを自由に想像させるなど、日常の授業とリンクした授業（学習機会）、「人類学」「考古学」とは何かがわかるようなワークショップを開き、研究の内容がわかるとよい、などの意見もあった。（黒沢）

(3) 南山単位校教員に対する意見聴取

2011年7月1日に、南山中学女子部教員約10名と、同月15日に、男子部教員9名、聖霊高校教員1名による意見聴取会を「博学連携」をテーマに開催した。なお、本聴取会の司会進行は黒沢が務めた。

①南山単位校教員からの意見

A：館施設について

- ・授業後に学生を引率したいので、18時まで特別開館してほしい。
- ・大勢の生徒を一度に収容できないことが難点である。

B：展示（室）について

- ・資料解説を詳細にしてほしい。
- ・現在の展示は少し難解である。小中学生でも楽しめるような工夫（ワークシート等の補助教材）があると良い。
- ・実際に資料を手にとって観察したい。
- ・音声ガイドがほしい。
- ・他館から借りた資料で企画展をしてほしい。

C：連携プログラムについて

- ・授業で出した課題についての調べ学習を、博物館で行ないたい。
- ・博物館資料を教材として使いたいので、アウトリーチをしてもらいたい。
- ・さわっても良い資料を貸し出してもらい



2011年7月1日 南山単位校教諭に対する意見聴取会

- たい。また、その資料に関する視聴覚資料も貸し出してほしい。
 - ・貸出資料をレプリカにしてはどうか。レプリカならば、安心して扱える。
 - ・国立民族学博物館の「みんぱく」のようなキットを作ってはどうか。
 - ・出前講座を開いてほしい。
 - ・資料の見方を指導してほしい。
 - ・職業体験の受入をしてほしい。学芸員という仕事に興味のある学生に、実際に博物館で行なわれている仕事を体験させたい。
 - ・フィールドワーク（古墳巡り）に学生を参加させたい。
 - ・出張授業をしてもらいたい。
- D：その他
- ・HPで博物館資料について調べられると良い。
 - ・オープンキャンパスの中学生版を開催してはどうか。様々な体験コースを用意し、その一つとして博物館を利用した授業を行なってはどうか。

- ・所蔵品のリストがほしい。
- ・骨格から肉声を再現した音声ソフトを、デジタル資料として収蔵してほしい。
- ・専任の学芸員の常駐を考えたほうが良い。
- ・博物館の広報物を単位校にも送ってほしい。
- ・収益を上げるようにしてはどうか。

②意見の概要

南山単位校の教員を対象とした本意見聴取会では、主に学生に資する博物館ないし博物館活動とは、という観点による意見が多く聞かれた。寄せられた意見は、館施設への要望、展示（室）への要望、連携プログラムへの要望、その他に大別でき、中でも展示（室）への要望、と連携プログラムへの要望が多く寄せられた。

展示（室）への要望としては、展示資料についての情報の少なさを指摘する意見が目立った。当館の現在の展示室では、展示資料に対するパネルやキャプションの説明

が少ないが、今後南山単位校を始め、他教育機関との連携を考えるうえで、利用する学生の学習段階を考慮した補助措置が必要であることは明白である。本会の意見の中にも、補助教材の必要性が提言されたが、学生の自発的な「まなび」を助長するためにも、十分な整備が必要といえるだろう。また、解説の人的サービス—補助人材—の整備も同様である。

展示（室）への要望、連携プログラムへの要望において、最も強調されたとしては、「さわる資料」についての方策が挙げられる。ある教員が「昔の人が使ったものが生で観察でき、利用できることが博物館の最大の魅力」と発言されていたが、この発言からも推察されるように実物資料が教材として高く評価されていることがわかる。また、さわる展示についての議論の中には、レプリカについての提言もいくつか聞かれた。内容は、「資料にさわりのない生徒による資料の破損」を考慮しての発言であったが、これをレプリカのネガティブな活用法と仮定すると、積極的に「さわる」ことを実現する、ポジティブなレプリカの活用法も博物館として強調してゆくべきであろう。

本会で出された意見からは、学校側には「博物館資料をどこまで教材として使って良いのか」という漠然としたためらいがあることがうかがえる。「学生に資料をさわらせることはできるのでしょうか」、「博物館の資料って貸し出してもらえるのでしょうか」といった声が多く聞かれたことは、裏を返せば、博物館の情報提供の指針が外部へ十分に発信しきれていないということである。南山大学人類学博物館では、名城

高校との連携授業や、学外実習生の受け入れなどを今までにも行なっており、その中で博物館資料を利用した試みも行なっている。しかし、それらの活動について、最も近い関係であるはずの単位校でさえ情報が行き届いていないという事実は、博物館側の情報発信の「マズさ」を浮き彫りにしたとあって良いだろう。（西川）

(4) 視覚障害者に対する意見聴取

2011年7月7日に、国立民族学博物館准教授・広瀬浩二郎氏と、社会福祉法人名古屋ライトハウスの協力を得て、「視覚障害者からの要望」をテーマとした意見聴取会を開催した。本聴取会の司会進行は黒沢が務め、基調報告とコメントを広瀬氏にお願いした。なお、本聴取会は、1章にて言及した広瀬氏による講演会と併せて開かれたものである。

①視覚障害者からの意見

A：博物館（美術館）の利用方法について
・中途全盲なので、色や形をもらえれば対象物の説明してもらえれば、ある程度のイメージは湧く。パンフレット等で下調べをして展示物のイメージを膨らませてから博物館へ行くが、やはり限界がある。さわるとよりイメージが豊かになるし、疲労も少ない。

ボランティアガイドの説明は、人によって説明の仕方が違い、面白い。

・小さい頃、博物館・美術館は非常に遠い存在で、楽しくはなかった。最近になって積極的に利用することになり、楽しさを知った。自分は少しだけ目が見えるのだが、博物館は暗くてエネルギーを消費



2011年7月7日 視覚障害者に対する意見聴取会
※中央が広瀬浩二郎氏

- する。展示室のどこに資料が置いてあるのか、探るのに一苦労する。資料を照明や壁の色に、もう少し工夫ができるのではないか。資料の背景まで説明してもらえると、見えないものが見えてくる。
- ・生まれつきの全盲である。博物館・美術館の点字表記が読み取りにくいことが多々あった。点字を示せば、すべて解決するという考えは賛成できない。説明を聞きながら、展示室を回りたい。一人で博物館に行っても、展示室をゆっくり解説してもらえるようなサービスがあると良い。
 - ・来館した所から補助のサービスがあれば、一人でも博物館に行きやすい。
 - ・視覚障害者の人に分かるような方法で、博物館のサービスや情報を発信してもらいたい。
 - ・途中で失明するまでは、博物館や美術館でキャプションを必死に読んでいた。しかしその時は満足しても、記憶としては残らなかった。失明してから展示資料をさわる機会があったが、その体験の方が記憶に残った。
 - ・弱視の人を頼りに、来館する全盲の人もいる。弱視の人が来館しやすいような施設にしてほしい。
 - ・点字ブロックやスロープといったハード面の配慮はもちろんあると良いが、やはり人的な補助がほしい。
 - ・展示物に集中できるような点字ブロックが良い。また、頭の中で思い描きやすい展示室の作りしてほしい。
 - ・触図を用意してほしい。
 - ・展示室のテーマが変わるごとに、展示室の床の材質を変えてみてはどうか。部屋が明らかに変わったことを、明確に視聴覚障害者に伝えることができるのではないか。
- B：音声ガイドについて
- ・自動再生の音声ガイドは、展示室でいろんな音が同時に流れているので混乱す

る。あまりに丁寧な説明だと、すべてを理解するのに時間がかかる。また、ポータブル音声ガイドは、ボタンが押しづらい。展示室内に固定されている手動の音声ガイドは、能動的にボタンが押せるが、他の音声と混じって聞こえる欠点がある。

- ・資料の前で番号ボタンを押すタイプのものは、使いづらい。
- ・音声ガイドを利用すると、聴覚を占有されてしまって困る。

C：web 活用について

- ・いくら音声説明を聞いてもさっぱりわからないサイトもある。アドレスを延々と説明されたこともある。
- ・サイトには写真や画像が多用されているが、音声には変換されておらず、また文章説明も少ない。写真や動画の具体的な説明がほしい。また、本文とその他の説明文の違いがわかりにくい。音声ページと文書ページを隔離しているサイトは、晴眼者と一緒に見ることができない。
- ・写真にカーソルを合わせると、読み上げてくれると分かりやすい。形や様子を一文でコンパクトにまとめてほしい。
- ・視覚障害者は主に音声読み上げソフトを利用しているので、簡便な説明を文書としても表示してほしい。
- ・説明は、音声だけで対象物が思い浮かべるかを数人でチェックすべきである。
- ・色の説明は躊躇せずに提示してほしい。

D：その他

- ・絵画ならば、テーマになっているものの模型にさわることができるかと距離感が縮まる。

- ・額縁まで再現した「さわる展示」だと、感動が増す。

②意見の概要

博物館のリニューアルに際し、当館は全人的な博物館を目指すことを目標にしている。これは「ユニバーサル・ミュージアム」の実現と換言することができる。すべての人が各々の学習要求のままに、心安く楽しむことのできる博物館を作り上げるために、今回は障害者の博物館利用という観点から、視覚障害者の方々より意見を求めることとなった。

博物館（美術館）の利用方法については、人的補助を求める意見が目立った。視覚障害者へのサービスというと、点字の解説パネルないしリーフレット、または点字ブロックの整備などを挙げることが多いが、実際に意見を聞くと、このようなハード面の整備よりも、人による館内案内ないし展示案内の充実を望む声が多く、サービスの需要と供給とのミスマッチが明らかになった。

「さわる展示」への要望は特に強いものであった。質感、重さ、大きさ……など触覚による資料情報開示の重要性—博物館における学習体験の中でいかに大きな感動をもたらすかということが、様々な切り口から語られた。

音声ガイドについての要望も、前述の人的サービスによって補完できる部分が多い。画一的ではない、個人の興味や学習要望に沿った臨機応変で柔軟な支援の充実は、障害の有無にかかわりのない、基本的な要望であろう。

また、われわれの考えるサービスがいか

に自己満足にすぎないかを認識させられた要望としては、web上の情報サービスが挙げられる。当館もHPを有しているが、それは文字による情報提供を前提としている。しかし、文字や画像情報を視覚によって得ることのできない視覚障害者は、音声ソフトによる変換によりweb上の情報を得なければならない。当館では、HPでの所蔵資料の情報提供のためデータ整備を進めているが、本会によって情報提供の形を再検討すべきであることが明らかになった。今後の情報提供の形を考えるうえで、非常に有益な意見を得ることができたといえよう。(西川)

3. 新・人類学博物館はどのようにすべきか——意見聴取の結果から——

以上に紹介した新しい人類学博物館に対する要望を踏まえ、博物館の基本的な方針を提示しておきたい。

(1) 大学教育の中の博物館

まず、人類学博物館が大学博物館である限り、それは第一義的に大学教育の一翼を担うものであることを確認しておきたい。ここでいう大学教育とは、博物館に軸足をおいたものであり、人類学・考古学・歴史学・博物館学などの専門教育、学芸員養成、そして大学での研究成果の公開、といった事柄を含んでいる。そして、その利用主体は学生であり、大学院生である。

だが、今回の意見聴取において、そうした教育機関としての大学博物館に対する要望はそれほど多くはない。挙げられるとすれば、「東ニューギニア調査団など、南山大学の調査によって得られた資料が展示され

ているので、過去の成果を知ることができる。また、これを活用した博物館学を学ぶことができる」という意見が最も具体的であり、「他学部の人でも気安く来館できるようにしてほしい」や「学生の活動を学外の人に公開する場を設けてほしい」「専攻学生の成果を他学部の学生にも見てもらえるようにしたい。他学部の知見も併せてゆけると良い」などがそれに関する意見であるといえる。逆に多いのは施設・設備面、あるいはサービスに関する要望であった。

そういった面での改善は当然のことであり、またハード面に関しては現在検討中であることから、ここでは言及しない。

大学博物館としての人類学博物館の基本方針は、大学博物館としての本来の役割をシンプルに果たしていくことに尽きる。つまり、大学における調査研究の成果を公開すること、そして、それを通じて大学での専門教育、学芸員の養成を行うことである。間違えてはいけないのは、まず前提としてなされるべきことが、研究成果の公開であるという点である¹⁾。

つまり、専門教育や学芸員養成が先立つと、大学博物館は閉鎖的で内向きなものとなっていく。大学博物館が博物館であるからには、社会に対して開かれていることが必須条件なのである。

だが、こうした理念とは裏腹に、現実には学生の博物館の利用は極めて少ない。これは多くの大学博物館で共有する課題でもあるが、これを博物館側の広報不足のせいばかりにするのはやや問題の本質を見誤っているように思う。若い世代が博物館に来ないのは、博物館を通じた知的な体験をしていないことに大きな問題があるのではな

いだろうか。その点からいっても、次に述べる「博学連携」は、今日の博物館には必須の活動であると思う。

(2) 博学連携

先述したように、博学連携はもはや一時的なものではなく、あらゆる博物館にとっての基本方針となっているといえるだろう。

人類学博物館では、先述のように、名城高校との学習連携を進めてきたが、今後はより多様で多角的な博学連携の形を模索していくことが必要である。

そのとき、最初に考えるべきは、南山単位校との連携であろう。これは(1)で述べた大学博物館としての役割とも重なり合うものである。

では、具体的にどのような方法が考えられるであろうか。

一つには従来のような、博物館に来てもらって、博物館を案内し、あるいは博物館資料を使った授業やワークショップを実施することが考えられる。また、多くの博物館が実施しているような出前授業も考えられるであろうし、これについては実際に要望もあった。

今回の意見聴取で注目されたのは、学校側の要望として、児童・生徒に実際に資料に触れるなどの「体験」を期待する声であった。だが、体験といっても実は様々である。博物館における「体験学習」といった場合、大きく「擬似体験」と「追体験」に分けることが出来ると思う。前者は、たとえば火起しや勾玉作りなど、現在の研究成果に基づいて復元された出来事を体験するものを指す。後者はそれとはやや違い、博物館

で説明されることがどのような研究プロセスを経ているのかを体験するタイプのものを指す。

博物館における「体験学習」としては両者ともに「アリ」なのだが、われわれとしては後者に重点を置きたい。つまり、児童・生徒に人類学や考古学の研究プロセス、あるいは博物館学芸員としての行動プロセスを「体験」してもらうことで、博物館を通じて、人類学や考古学、そして博物館へと接近する道を用意したいのである。もちろん、それを行うには、対象年齢やニーズの問題も考慮する必要がある。だが、博物館離れがすすむ中で、博物館それ自体の楽しさや研究するということの楽しさを知ってもらう方策として、時間はかかるかもしれないが、ベターな選択であると考えている。

また、新しい試みとして、授業の進行に合わせて博物館資料を貸し出すことが要望されたことは大きい。全国的にみればすでに国立民族学博物館の「みんぱっく」や北名古屋市歴史民俗資料館の「回想法キット」などがある。それらを前例として、要望に応じて博物館資料を貸し出す仕組みを確立することは検討に値する。その際、もちろん資料の安全性が図られなければならないことは言うまでもないが、それ以上に、博物館スタッフが説明しなくとも、学校側ですぐ使えるような使用マニュアルを用意することが重要であろう。さらに、そこから一歩踏み込んで、博物館資料を学校に貸し出し、一定期間展示してもらう「サテライト展示」も試みる価値があると思う。これに似た取り組みは、東京大学総合研究博物館が「モバイル・ミュージアム」として

実践しているが、ここでは資料の学習教材としての面を強調したものとして構成したのである。

考えてみれば、こうした授業用の貸し出しキットの製作やサテライト展示は、ある意味で博物館を身近に「体験」する試みであるともいえる。

博物館としては資料の保全を図ることも重要だが、それをいかにして活用していくのか、博学連携の中でそのことが問われているものと思う。

(3) 「全人的博物館」へ

最後に標榜したいのは「全人的博物館＝ユニバーサル・ミュージアム」への試みである。

今回は視覚障害の方々から意見を聞くことが出来た。おそらく、多くの博物館・美術館が障害者対応をどのようにしていくのかを検討しているのであろう。そのことは、7月7日の講演会・意見聴取会に博物館関係者の出席が多かったことでもうかがうことができる。そういう意味で、博物館関係者や学生・大学院生たちが視覚障害の方々の声を直接聞くことが出来たのは大きな成果であると言ってよい。

だが、われわれは何も視覚障害者のための博物館を作ろうとしているわけではない。われわれが目指すのは、これまで博物館が、意識的にせよ無意識にせよ、排除してきた様々な人たちが、何ら特別なこととしてではなく博物館を利用できる仕組みを構築したい、ということなのである。では、日本の博物館がこれまで排除してきた人たちとは誰か？それは身体障害者の人たちであり、日本語を解せない外国人であった。

身体障害者と一口に言っても、様々な障害の在り方があるが、中でも最も博物館を利用しにくいのは視覚障害者であることは言うまでもない。その人たちが、博物館を利用するためには、「見る」ことではなく「触る」ことが必要となるが、ほとんどの博物館では資料は展示ケースに収められ、さわることはできない。もちろん、それにはセキュリティや資料保存の問題などがあり、それを遵守することこそ博物館の本来の使命であるとさえ考えられる。だが、広瀬氏によるユニバーサル・ミュージアムの提案は、その前提を転倒させ、これまでとは違う博物館の役割を提起しているように思える。われわれとしては、人類学博物館の将来をこの可能性に賭けたいのである。

具体的には、点字による解説だけでなく、全面的な「触れる展示」の実現がある。また、床の仕様を変えて、コーナーの変化を示すといった提言は、われわれ晴眼者では思いもよらない発想であったし、音声ガイドが実はあまり実際的ではないなどの指摘は、これまでの博物館がいかに晴眼者の独りよがりであったかを端的に示している。要するに、ここで出された視覚障害者からの指摘は、これまでの博物館の障害者対応が博物館側の自己満足にすぎなかったことを露呈しているのである。

われわれが最も反省しなければならないのは、視覚障害者に対して何か特別な対応をしなければいけないという思い込みである。これは後日いただいた名古屋ライトハウスの方々からの意見にもあったことだが、結局博物館側が何か特別な仕掛けを用意するということは、視覚障害者にとって

は負担にしかない、ということである²⁹⁾。このことから言えるのは、ユニバーサル・ミュージアム実現の第一歩は、博物館が視覚障害者のために「何か特別なこと」を用意するのではなく、彼ら/彼女らが、人的な援助は必要であるにせよ、普通に立ち寄れる博物館を構想することなのである。

実は、今回、視覚障害者を対象としたのは広瀬氏からのアドバイスで、まずもっとも博物館を利用しにくい視覚障害者に利用可能な博物館を構想することを足掛かりとすることを「戦略」としたからである。

視覚障害者にとって利用しやすく、心地よい博物館は、すべての人にとって利用しやすく心地よいはずである。ここに思い至ったことが、人類学博物館をして、ユニバーサル・ミュージアムへと大きく舵をきるきっかけとなったことは確かである。

また、外国人に対しては基本的に多言語表記を行うことを前提としている。だが、人類学博物館としては、特に資料収集地の人たちが展示等において自文化を表象するプロセスに参加する回路を拓くことが必要であると感じている。そのことを実現するための具体的な方策の1つは、ニューギニアやタイ北部山地民の資料を、現地の言葉で表記することであろう³⁰⁾。

さらに、博物館展示における民族表象は、しばしば非歴史的なものとして扱われるという批判にも真摯に向き合わねばならない。つまり、展示資料によって示されたあるコミュニティの文化は、今も昔も変わらないものとして提示されてしまうことを克服するためにはどうするかということであり、そのためには継続的で長期的な資料採

集地の人々との結びつきが必要になってくる。だが、これについてはどのようにすべきか、目下模作の中にある。(黒沢)

おわりに

以上、新しい人類学博物館について、様々な立場の方々からいただいた意見に基づき、その基本方針について述べてきた。まだ具体性に欠けるところも多いし、どこまで実現できるかも不透明である。今後も様々な意見に耳を傾け、新しい博物館づくりに反映させていきたい。

また、新しい人類学博物館は、決して2013年10月に予定されるリニューアル・オープンの日をもって完成するわけではない。これからも人類学博物館や、日本の博物館をめぐる様々な課題を受け止め、進化し続ける博物館でなくてはならないだろう。

だが、それは状況に応じて変わっていく博物館になるという意味ではない。やはり博物館としての動かせない骨格は必要なのである。そして、それをキャッチ・フレーズとするならばこうなる。

全ての人の好奇心のための博物館

Universal Museum for Curiosities

これが新・人類学博物館の基本方針である。(黒沢)

註

- 1) 人類学博物館の将来構想に関する議論の中では、「人類学」に特化するのではなく、もっと総合的な博物館にしたかどうか、という意見をしばしば聞くことがある。だが、われわれはそうした立場はとっていない。今日の博物館全

体の趨勢をみれば、歴史・芸術・自然などを網羅的に扱う総合博物館よりは、ある分野に特化した博物館のほうが評価される傾向にある。ましてや大学博物館は単なる大学のガイダンス施設ではなく、そこに集積された知的財産・学術標本こそが命であるといえる。そういう意味で、南山大学の場合には、全国的にも知られている人類学・考古学に特化した博物館であり続けることは自然なことであろう。また、収蔵資料の性質や、博物館スタッフの数からいえば、総合化することなど非現実的な話であると言わざるを得ない。

- 2) 名古屋ライトハウスからの意見の中には、障害者に対する入館料の減免すら必要ないという声があった。
- 3) だが、これは実現が難しい。というのもパプアニューギニアにはおよそ 800

以上もの言語があり、話者が 100 名程度の言葉すらある。採集地ごとに、その土地の言語で資料名称等を確認していくのは現実問題としては不可能に近い。ただし、パプアニューギニアの場合には、共通語としてのトク・ピジンやヒリモワ語があるので、それを採用していくことが当面の目標となる。

参考文献

- 伊藤寿朗 1993『市民のなかの博物館』吉川弘文館
- 西野嘉章 1996『大学博物館——理念と実践と将来と』東京大学出版会
- 広瀬浩二郎 2009『さわる文化への招待 触覚でみる手学問のすすめ』世界思想社
- クノー、J. 編（村上博哉・小野寺玲子・平川淳・森美樹訳）2008『美術館は誰のものか 美術館と市民の信託』ブリュッケ

A Proposal for the New Anthropological Museum

KUROSAWA Hiroshi and NISHIKAWA Yukari

The Anthropological Museum of Nanzan University is now preparing for renovation in October, 2013. At this occasion, the museum, aiming to become 'the museum for everybody', asked people of different status for their opinions and tried to reflect them for our basic plan. We gathered opinions by discussion and questionnaire from (1) students and postgraduate students, (2) school teachers, (3) teachers of each school/university of Nanzan School Cooperation, and (4) visual disabled people.

As a result of questioning, we recognized that the basic plan of our museum should be exhibiting the results of research at the university. It is also important not only to offer specialized education to students of Nanzan University but also to be open to the general public. Some people suggested the importance of educating school children and students through hands-on learning and satellite exhibition by cooperation between the museum and university, so that they would be familiar with the museum, then, interested in the specialized research carried out by the museum staff. Suggestions by visual disabled people were more crucial. It is our obligation to make museum for both people with and without disability. Museums have prevented those disabled people from visiting museums either consciously or unconsciously, but those people want to visit and use museum like other people. The basic plan of our new Anthropological Museum will be '*Universal Museum for Curiosities*'.

平成 24 年 3 月 16 日 印刷

平成 24 年 3 月 22 日 発行

南山大学人類学博物館紀要 第 30 号

編集・発行人 南山大学人類学博物館
466-8673 名古屋市昭和区山里町 18
TEL 052(832)3111 (代表)

印 刷 株式会社クイックス
456-0004 名古屋市熱田区桜田町 19-20
TEL 052(871)9190